

# 天翔け地這う

第二卷 超々人への道

生野以久男

# 第一章

1

「よくできた。ではつぎだが……」

老人は耀にほほ笑みかける。彼は耀の教育係だった。名をハクリという。頭髪はなく、眉は白く、顎には白い髭が長く伸びている。年をとっているが、足腰はしゃきつとして、背は高い。一メートル八〇センチはゆうにある。

耀が「天の組織」の正式メンバーになるには、いくつかの「術」を習得しなければならなかった。たとえば、透明自在、瞬間移動、変幻自在、一体同化、タイムスリップといったものが基本の技で、いまその訓練中だった。

「術」の訓練に入ると、耀は幼児の体つきでなくなっていく。訓練とともに、身体も成長するのか、バランスのとれた体格となった。技をかけると、つねにその技が最高の効果を発揮するように、本人の体格がその技の最適身体条件をもつように自動的に修正されるらしい。要は、「術」がつねに最高の状態で用いられるということだ。

耀は飲み込みが早かった。こどもだったせいかわ、頭には余計な夾雑物が入っていない、それだけに新たなものを素直の吸収できたのかもしれない。

だが吸収が早いものは、往々にして、応用問題に弱いものだ。

長年教育係を努めてきたハクリには、その点、心得たもので、耀につきつぎとさまざまな応用問題を課していく。

「ヨウ、つぎは敵に捕まったときに逃げ出す方法だ。ヨウが敵に捕まって頑丈な牢に入れられてしまった。どうやって、抜け出すか」

「敵がボクを捕まえることができるんですか……」

耀は透明自在、瞬間移動、変幻自在の「術」を使えば、誰も捕まえることができないはずだと思った。捕まることがないのに、なぜこんな問題を解かなければならないのか、理解できないのだ。

「それは分らん。とにかくどんな事態にも備えておくことだ。いいかね。じゃ、ヨウ、いくよ」

ハクリの手を叩くと、鉄柵が天から降りてきて、耀が鉄格子の牢に閉じこめられてしまう。耀は鉄格子の隙間から難なく抜け出てしまう。

「よし。だが出ただけですぐ捕まってしまうぞ。どうする……」

ハクリはヨウをじつと見つめ、つぎの行動を促す。

「すぐ遠くへ逃げる。それから……」

「そうだな。それからどうする……」

「えーと……」

耀は習い立ての「術」を思い浮かべる。透明自在、瞬間移動、変幻自在、一体同化、タイムスリップ……。

「そうか。姿を変えたり、消したりすれば気付かれない。牢から脱出したら、変装したりして別人になりますますことです」

「そうだね。牢から脱走するときには脱走したあとのこともすべて考えて行動することだ。ではつぎの問題だ。だんだん難しくなっていくぞ。つぎはこれだ」

ハクリはまた手を叩く。ガラスの箱が降りてきて、耀を閉じこめる。

耀はすぐ透明自在の技を使つて姿を消す。だがそのあとどうしてよいの

か分からず、中央に座り込む。

ハクリはじつとガラス箱を見ている。

一瞬、ガラスなら叩いて割ってしまえばいいと思った。彼はガラス面に近寄り、思いきり叩く。だがビクともしない。ガラスの壁は鉄格子より頑丈だった。

彼はこれまで習得した「術」を思い浮かべる。だがガラスの牢屋から抜け出す方法が思いつかない。彼はガラス面に穴や隙間がないかくまなく調べ。ガラス箱はまるでひとつの器のように成型されていて、接着箇所や接合箇所はどこにもなかった。

彼はガラス越しにハクリを見た。ハクリには透明のヨウが見えるのか、ヨウから目を離さず、ヨウの動きをじつと見つめている。

ハクリが見ている以上、脱出法はあるのだ。耀はもう一度これまで習得した「術」を思い浮かべる。

透明自在、瞬間移動、変幻自在、一体同化、タイムスリップ……。

彼は「術」のひとつひとつを思い浮かべ、闇雲に、頭のなかで技をかけたときのシミュレーションを重ねる。

透明自在。これは自分が思いのまま透明になる「術」だ。持ち物も透明にできる。だがこれはガラス箱からの脱出には使えそうにない。瞬間移動はどうだ。これもだめだ。

変幻自在はどうか。これは姿を消したり現れたり、あるいはどんなものにも変わることのできる「術」だが、ガラスの内部構造の隙間を潜り抜けるほどに極微細なものに変わることができるか。耀は頭からムリだと跳ね除けてしまった。

一体同化もムリだ。ではタイムスリップはどうか。

彼はタイムスリップのシミュレーションをはじめめる。過去へか、それとも未来へか。彼は過去を選ぶ。無造作に、スリップするタイムを一〇年に設定する。スイッチオン。時が刻みだす。

ハクリが盛んに手を横に振っている。制止の合図か。だがもう間に合わなかった。

耀は宙を飛んで、タイムトンネルを潜り抜けていく。

2

「ヨウがスリップした。行方不明になるかもしれない。ミサはどこだ」

ハクリの慌ただしい声がした。

「耀がどうかしたのかしら」

未佐はアナウンスに聞き耳を立てる。

「ミサ、日本ブースのスクリーンの前に至急……」

金属性のアムンの声が響く。

未佐は訓練場から日本ブースホールへ瞬間移動する。

スクリーンの前でアムンとハクリが待っていた。

「リセットすればもとの場所に戻るのだが、問題はパニックになったヨウがその方法にいつ気付くかだ」

「気付かなければ……」

「気付くまで、いつまでも彷徨いつづけることになる」

「連絡もできないのですか。一体、どうしてそんなことになったんですか。

あのととき、だから……」

未佐は二人の話に口を挟む。

ハクリがこれまでの一部始終を話す。

「だから……」

未佐はアムンを睨み、もう一度繰り返す。「術」をマスターするまでは耀と一緒に訓練するのがいいと言ったのに、自立を重く見るアムンが許さなかったのだ。

「とにかく、ヨウを早く探しだすんだ。ミサ、どこか思い当たるところがないか」

「……………」

「時間を一〇年前に設定したことまでは分かっているのだが……」

「行き先は……」

「分からない。設定したかどうかさえ分からないのだ」

「行く先を設定しない場合はどうなるのですか」

「方々を彷徨うことになるが、自分が行きたいところが見つければそこを目ざすことになるだろう」

「でも一〇年前には、耀はまだ生まれていないわ。生まれていないものに行きたい場所が考えつくかしら。もしかしたら……」

未佐はモニターを操作する。スクリーンに都市近郊に広がる団地が映し出された。木実子の家がある新興団地らしい。彼女が一時居候として、耀と一緒に過ごしたところだった。

すぐ近くに雑木林があった。その向こうに産廃処理場の焼却炉のずんぐりした短い煙突が見える。

「もしかしたら、あれが……」

彼女は独り言を呟きながら、ズームアップしていく。

「そうだわ……」

一〇年前の風景だったが、彼女はまえにも見たことのあるような気がして、しばらく懐かしそうにスクリーンを見つめていた。この産廃処理場は、一年前、耀と一緒に襲撃したものにちがいがなかった。あの夜、焼却炉めがけてダイナマイトを投げ込んだのだ。

「この焼却炉だったのかね、きみたちが爆破したのは……」

アムンの金属性の声が耳元でした。

「ええ……」

未佐はスクリーンを見つめたまま、軽く頷く。

「この辺一帯が一〇年前と殆ど変わっていないとすれば、ヨウにも見覚えがあるかもしれない。だがヨウはまだ小さかったか……」

アムンは未佐のこのところの中を読み取っているのだ。

「耀に連絡する方法は……」

「ない。ヨウからの連絡を待つほかない。全メンバーにはわたしの指令がどこにいても届くが、ヨウは訓練中だったので、まだその装備をつけていなかったのだ。ミサには以前特別渡してあったのが……」

アムンは後悔の念を滲ませた眼差しでじつとミサを見た。

「アムン、わたしが耀を探してきます。行かせてください」

アムンは未佐に目を据えたまま、口を開こうとしない。

「一刻も猶予ありません。耀が迷子になったら、もう探しようがありません。いまなら、まだ心当たりを当たれば手がかりを掴めるかもしれないです」

「かもしれないが……、もしヨウが見つからなかったなら、必ずわたしの指示に従うように。それから……」

アムンはハクリを振り返る。

「わたしも一緒に行きましょうか」

「ヨウとミサはやつらに顔を知られている。見つければ、襲ってくるにちがいない。今度こそ、捕まえようとするだろう。十分気をつけるように。頼んだよ」

アムンはハクリとミサに合図する。ふたりは宙へ飛んだ。

### 3

突然、耀はかつて見たこともない広大な草原に放り出された。近くで一匹のヤギが急に現れた耀に驚き、草を食べるのを止め、じっと見ている。

よく見ると遠くにも点々とヤギの姿があった。彼はしばらく見慣れない風景を珍しそうに眺めていた。

「ここはどこだろう」

彼はふと、タイムスリップするとき、行き先を設定しなかったことに気づく。

行き先を決めて瞬間移動だ。そこで彼は草原の中央に立って「ママに会いたい」と念じ、宙に飛び上がり、天を翔ける。

天空をぐるぐる回る。「あ、ママじゃない。ママになるひとだよ」と言い換える。

見慣れない風景がつづく。耀は見覚えのある風景がないかと彷徨う。都会のど真ん中に出た。高層ビルが立ち並ぶ一角だ。見たこともない風景だった。

耀はスリップの設定時間を一〇年前に設定していたことを思い出した。

「ママはまだぼくのママではないからな」

彼は自分がまだ生まれていないまえのことだと自分で念を押す。だからどこか分らないのは当たり前なんだ。

「ここはママがぼくのママになるまえに働いていたところだろうか」

彼は一番高い高層ビルの屋上に立ち、大小のビルが建ち並ぶ周囲を見渡す。ビルの谷間を縫うように高速自動車道が走る。その上を米粒のような自動車が疾走していた。

彼はぐるりと一回転して三六〇度全方向を見終えると、視線を地平に向ける。スモッグのせいかわ、地平は霞のなかであって、何も見えない。

突然、彼の脳裏に煙が襲つてくると怒り狂うママ木実子が浮かんだ。咽せるような悪臭とともに、ママ木実子と一緒に住んでいた家が思い浮かぶ。

あの家はどこにあるのだろうか。悪臭の煙が吐きだし、ママ木実子を悩ませた産廃処理場はどこにあるのだろうか。

彼はスモッグの向こうを透かして見ようと目を細める。だが何も見えない。もしかしたら、スモッグの向こうには何も見えないのかもしれない。ここは一〇年前の世界だ。自分が生まれていないのに、なにがあるのか考えてみても仕方のないことだ。なにかがあるとしても、そこになにかあるのかどうかさえ自分には分からないことなのだ。

それでも彼はじつとなにも見えない地平を見つめていた。

地平の向こうに限りない曠野があるのだろうか。それとも眼下に広がる都市が遠くまで広がっているだけなのだろうか。

遠くからメロデーが流れてきた。どこかで聞いたようなメロデーだった。彼は必死に思い出そうとする。小さいときに聞いたように思う。

でも思い出すことができない。まだ赤ん坊のときかもしれない。いや、そんなことはない。ここは一〇年前の世界だ。

もしかしたら古くから歌い継がれてきた子守歌なのか。なんとなく懐かしいメロデーだった。彼はじつと耳をそばだてる。

彼は生きている世界に戻りたかった。懐かしいメロデーに浸りたかった。だが生きているということはどのようなのだろうか。

彼は何年前に自分の生まれたか、正確に覚えていなかった。いや、「天の基地」にいるうちにいつのまにか時間の観念を喪失していたのだ。だから、自分が生まれてもいない過去へタイムスリップしてしまったのだ。

とすると、生きるということは時間という糸を紡ぐことか。時間の糸を紡ぎながら、伸びていく時間の糸にさまざまな出来事や出会いの記憶を刻んでいくのだ。一人ひとりが時間の糸を引きずって生きているといえないか。

メロデーが耳に木霊する。もう一度生きていた世界に戻りたい。彼は必死に考える。そしてようやくもう一度タイムスリップしようと決心する。

これは危険なことだった。タイムスリップを繰り返していると、時間の混同を招き、時間の迷子になるおそれがあるからだ。だが彼にはまだその認識はなかった。

彼は前後を考えずに、五年前に設定して、タイムスリップする。

一〇年前にタイムスリップしてから、いま五年前に戻ったところだった。タイムスリップすれば、スリップしたところから時間がはじまる。スリップしている間中、ビデオテープが再生するように時間が動き出すのだ。そしてその時々々の出来事が再現されていく。だから、時間の流れに身を任す

なら、ふたたびそこから飛びだすまでの間、彼がなにもしなくともよかった。

誰が口ずさんでいるのか、メロデーが響く。歌声に誘われるように、彼は声のするほうへ近付いていく。

雑木林が見えてきた。方々から煙が立ち上っている。近くに戸建ての住宅が立ち並ぶ団地が広がっている。

彼は急降下していく。歌声が響く。ひとりの女の人が七、八か月の赤ん坊をおんぶして歩いてくる。

年配の女の人が間近に迫る。まえに何度も見たことがあるような顔立ちだった。だが誰だったか思い出せない。彼は近付いてきた女の人の後ろに付いていく。

女は一軒の家に入ってしまった。彼もあとにつづく。

「おっぱいの時間なのに、どこに行っていたの」

リビングルームに入った途端、若い女が飛び出してきた。

ママだ。彼はママ木実子のまえに飛び出そうとした。だが目の前に立つても一人息子の耀に気づくことはないだろう。目に見えないのだから仕方がないけれども、彼にはやるせなかった。彼は部屋の隅でじつと我慢してふたりの動きを追っていた。

「ハイハイ、耀ちゃん、ママのおっぱい飲もうね」

年配の女がおんぶしていた赤ちゃんを下ろす。

「この赤ん坊がボクなの……」

彼は「耀ちゃん」と呼ばれた赤ん坊をじつと見た。

「耀ちゃん、いま用意するからね」

彼は返事する代わりに、声のするほうを覗く。

「またあれなの。ほ乳瓶からなんとかという化学合成物質が溶け出すとかいつていたわよ。母乳が一番なのに」

「お母さんは黙ってて」

まえに何度も見たような気がした年配の女の人はママのママ、耀の祖母貴世だった。彼は懐かしく思ったメロデーも祖母がいつも歌っていた子守歌と同じだったことに気付く。

彼はこのまましばらくこの家に居座り、自分の生い立ちを見たいと思っただがどうすればいいのかわからなかった。ただじつと片隅に座って、祖母貴世やママ木実子を眺めていた。

彼はオッパイのほうがいいのにと思いつつながら、ほ乳瓶にかぶりつくようにしてミルクをぐいぐい飲んで赤ん坊を見ていた。

いつの間にか、祖母の姿がなかった。急にいなくなった祖母が気になったが、彼は赤ん坊の自分にこころを奪われ、赤ん坊が動かす小さな手足の動きに見惚れていた。

4

「早く見付けて上げないと、耀ちゃんは……」

未佐は口の中で呟く。彼女は時間の擦れ違いによって、耀を発見できなくなることをおそれていたのだ。だが彼女にはそれよりもおそれていることがもうひとつあった。

時間は連続しているが、人との関係では階層的に過ぎていく。たとえば、ある時間にある場所にいたひとは、つぎの時間にはその場所にいるとはか

ぎらない。時間が経てば、事物は変化する。時間は人や事物に変化をもたらす。

「ミサ、何か言った？」

ハクリがミサの目を覗き込む。

未佐は慌てて目を伏せた。彼女は耀が木実子の一撃を受けて伸びている若い男の陰部を興味深そうに覗き込んでいたときのことを思い浮かべていたのだ。

彼女は耀に自分の身体が他の人と違って知っていることをまだ知って欲しくなかった。だが彼女にはなぜそう感じるのかよく考えたことはなかった。ただなんとなくそう感じていたにすぎない。

もし耀にそのことを知らせる必要が生じたときには、彼女自身が教えたかった。彼女が自分の身体が他の人と違って知っていることを知ったときのショックを思い浮かべ、そうすることによって、耀が受けるショックをできるだけ小さくしてやりたかったのだ。

「それは難しいことだ」

ハクリにもミサの気持ちがかかるのか、呟く。

「ミサ、心配してもしかたがない。なるようにしかならないのだ」

ハクリはミサにその理由を話す。

ヨウは「天の基地」で、透明自在、瞬間移動、変幻自在、一体同化、タイムスリップの「術」を習得し、技を磨いてきた。そしてこの技に習熟するには成人の身体を必要とするのだ。もしヨウが自分の身体の違いに気づいたならば、習得したあらゆる「術」を用いてその違いやその原因を探求するだろう。不明なことや分からないことに遭遇したときにはそうすることをこれまでとことん教えてきたのだからだという。

「でも……」

未佐は目を潤め、未練たつぷりに呟く。

「これまで探してもみつからないのは、ヨウがタイムスリップを繰り返しているからにちがいない。もしそうなら、このまま探しつづけても探しだすことはできない。一度『基地』に帰って、戦略を練り直したほうがいい」

ハクリはアムンに指示を仰ぐ。

折り返し、アムンから帰還の指示が送られてきた。

5

「われわれの行動を邪魔するものは許さない。徹底的に排除するのだ。これが本部の当初からの方針だ……」

広い会議室の中央に円形に置かれた大きなテーブルがあつて、その周りに三重に椅子が配置してあつた。テーブルの中心には高い天井から巨大なシャンデリアがぶら下がり、無機質の眩い白い光を放っている。

前面の中央には議長席のあるテーブルがあつて、議長席の左右が本部関係者の席だ。その前方の馬蹄形のテーブルには世界各地の代表が陣を取っている。テーブルの背後の椅子は各代表のスタッフのためのものだった。

円形に配置されたテーブルは会議での自由な発言を促すためのものというより、互いに監視するのに都合がいいからにすぎない。というのも、会議での代表たちの発言は殆どなかったからだ。いや、それは会議ではなかった。内容は上からの指示や連絡伝達事項が主であつた。これなら、メールやテレビ電話で十分だったが、極秘事項が伝達されることもあつて、年二

回は代表を本部に呼び寄せることが決まっていた。

今日はその年二回目の会議だった。

秘密結社「黒の集団」の本部は砂漠のど真ん中にある。本部ビルは地中深く埋まっていて、外部からその存在すら気付かれないようになっていた。内部は要塞のようだった。

議長の話はつづく。出席者全員が黒装束であるが、議長だけが黒の尖り帽子を被っている。

「世界経済は長年、大量生産大量消費大量廃棄方式で経済成長を果たしてきた。必要を満たしても、さらなる消費を目指して、あの手この手の宣伝やCM、あるいは見た目をよくしたり奇抜さを売りにしたデザインを弄して大衆に浪費を強いてきた。こうして世界経済を無理やり成長させてきた……」

その結果、資源枯渇の危機が迫るなか、大量のゴミ処理に追われ、世界のいたるところに処理しきれないゴミが山となつた。地球規模にわたり環境が破壊され、環境が汚染し、さまざまな地球環境問題が噴出した。それにもかかわらず、われわれは世界経済の成長を求めて、世界規模で大量生産大量消費大量廃棄を推し進めてきた。森林は伐採され、動物は棲息場所を失い、生物生態系が破壊されて至る所で綻びかけ、地球環境は荒廃して取り返しのでないところまで悪化してしまっている。

「このような状況のもとでは、もはや、大量生産大量消費大量廃棄で世界経済の成長を飽くなく追求することはできない。こんなことを繰り返していれば、地球環境は完全に破壊し尽くし、地球資源の枯渇を招き、自分自分の首を絞めることになる……」

われわれはこれまで、先達同様に、環境悪化や資源枯渇は化学の力で解



決できると踏んできた。だがそうはいかなかった。いやむしろ事態は悪化している。予期せぬ副作用が大問題を引き起こしたのだ。われわれの力が大きくなっただけその副作用も絶大になってきている。たとえば、理想的な冷媒用化学物質と思われていたフロン（CFC（クロロフルオカーボン））は成層圏を超えて上空のオゾン層を破壊して、われわれを含め地上の生きものに宇宙線（紫外線等）の危険に曝している。またつぎつぎに開発される化学合成物質は地球環境を汚染し、生物生態系を台なしにしている。そしてわれわれが口にするあらゆる食料を汚染し、地球環境を化学合成物質漬けにしているのだ。

「こうなってしまうてからは、これまでのようなことをつづけるわけにはいかない。かといって、経済活動を止めるわけにはいかない。まして世界を支配するためには、われわれが手にする収益を減らすわけにはいかない。では収益を最大限に維持するにはどうすればいいか……」

化学技術のとらわれずに、他の分野とのコラボレーションも考えられていた。たとえば遺伝子工学とのコラボレーションによる遺伝子組み換え植物と最適農薬開発、あるいは材料工学とのコラボレーションによるナノ技術の化学合成物質開発への応用などだ。だが基本原理を変えるまでにはいかず、環境（自然）との対抗関係を是正し、共存共生関係までにはいかなかった。

「だがこの三〇年来、世界の人口が爆発的に増えてきているにもかかわらず、消費は停滞し、世界経済は伸び悩んでいる。いや、縮小傾向にあるといつてもよい。いくらものをつくっても売れないのだ。なにをやっても売れないのだ。要は、われわれが手にする収益がいまや遞減傾向にあるということだ。人口が増えてもものを買える消費人口が増えないのだ。世界経

済は勢いを失い、停滞し出した。すでに過剰生産の時代に入ってしまったらしい……」

技術開発に産業革命時代の活気がない。というよりも人びとは技術開発そのものに懐疑的なのだ。あまりにも巨大化高度化大量化した科学技術の進歩そのものが率直に社会に受け入れられなくなっているのだ。

「そこでだ。われわれは環境悪化や資源枯渇を睨みながら、持続可能な最適生産を計り、最大利益を確保する戦略に舵を切ることにした。それには最適生産に見合った最適消費を演出しなければならぬ。ではどうするか。だがこれは口で言うほど、簡単なことではない……」

議長は地区代表の顔を一人ひとりゆっくり眺めていく。「どうしたらいいか。結論からいえば、世界人口を操作できればいいのだ。人間を生かさず殺さず、こちらに向せることができればいいのだが……」

議長は頭を傾け、じつと考え込む。議長の邪魔をしないようにしているのか、会議場は水を打ったように静かだ。

彼には若き日に冒した秘密があった。いまになって悔やまれるが、逆に、これを利用する手がないか知恵を絞っていたのだ。

「どうするのが一番いいのか、当分は試行錯誤するほかない。これまで日本地区でいくつかの実験を試みてきたが、世界戦略を変えるにあたって、引き続き日本地区で新たなプロジェクトを開始する予定だ。ここでふたたび、いくつかのモデルについてシミュレーションを行い、最善の方法を見つけだすつもりだ。効果のある方法が見つかれば、各地区で再実験を行うことになるだろう。全世界に適用できる方法が見つかればいいが、地区ごとの特性もあるだろうから、たとえ適当な方法が見つかっても、そのまま他地区へ適用することはできない。さらに各地区ごとに当該地区に適した

方法へモディファイする必要があるだろう。その時に備え、各地区での準備も抜かりなきように……」

議長にはいい考えが浮かばなかった。若き日の秘密が大きく口を開けて襲いかかろうとしている。いまになって悔やんでも遅かった。彼は次第に窮地に追い込まれていく自分を感じていた。

「以上だが、最後に、今朝、『天の組織』に大きな動きがあったことを知らせておく。日本地区でのことだが、慌ただしい妙な動きだった。いまのところ日本地区から他の地区へ波及することはないだろうが油断なく備えておいてもらいたい。あとで日本地区代表は別室まで来るように」

議長は姿を消した。

6

耀ははつとして、まわりを見回す。部屋の片隅で、いつの間にか眠り込んでしまったらしい。目を覚ましたときには辺りはすっかり変わっていた。一体、どのくらい眠っていたのだろうか。かなり長い間眠っていたような気がする。

もう一度、今度はゆつくりまわりを見回した。ママ木実子はいなかった。誰もいなかった。

彼はただひとり部屋の片隅に取り残されていた。深い寂寥感が襲う。まるで自分が解体され、ばらばらになった身体が方々に飛び散っていくようだった。彼はじつと耐えた。

ふと、女と男の声が切れ切れに聞こえたような気がした。

彼は声のした方に目を向ける。

前へ一歩踏み出した。瞬間移動だ。

「停留精巢？」

ママ木実子だった。

「精巢がまだ身体のなかに留まっている……」

ほっそりした痩せた感じの若い男がしきりに口を動かしている。男は白衣を着ているところを見ると、医師かもしれない。

「精巢？」

「睾丸ともいいますが……」

「睾丸……」

彼は思わず声を出した。突然、若い男の股間が目に見えかんだ。産廃処理場の焼却炉の前で伸びていた男の股間に鶏卵より若干小きめのボールが二個ぶら下がっていた。

彼はそつと股間に手を突っ込む。ボールはなかった。

「手術しなければならぬかもしれないのですか」

「精巢が腹腔やそけい部に留まっていると、精子をつくりだすことができない……」

「すぐ手術できるのですか……」

彼はしばらく二人のやり取りを聞いていた。

彼はもう一度股間を探る。やはり睾丸がない。手術が失敗したのか、それとも手術ができなかったのだろうか。

自分がだんだん分からなくなった。睾丸がないことがどういふことなのか、分からなかった。ただなんとなく自分が自分でないような気がして、堪らなかった。

彼は訳が分からなくなって、外へ飛び出していった。

7

「やはり、ダメでした……」

未佐とハクリの報告を黙って聞いていたアムンは、腰を下ろしている椅子をぐるりと回し、ふたりに背を向ける。

背後の壁に大きなスクリーンが現れた。

「ミサ、ヨウはタイムスリップ中にタイムスリップを繰り返しているようだ。だから、簡単には見つからなかったのだろう。ヨウは自分の家を見付けたらしい……」

スクリーンに未佐が寄宿していた戸建て住宅が映し出された。未佐は思わずスクリーンに吸い寄せられ、じつと映像を見つめる。だがいまは空家になっているのか、人影はなかった。

「ここには年配の女がひとり住んでいるようだ。いまは姿が見えないが……」

アムンは椅子を回転させて、ふたりと向かい合う。

「きみたちがヨウを見付けなくてよかったかもしれない……」

「え?……」

未佐はアムンの考えていることが分からなかった。

「ヨウにはこのまま当分の間、自分探しの自立への旅をつづけさせたほうがいいだろう。もしかしたら、なにかを掴みかけているのかもしれない。きみたちは『黒の集団』に不穏な動きがないか注意して監視をつづけるこ

とだ。彼らは過去まで入り込めないが、ヨウが現在に引き返したときを狙って仕掛けてくるかもしれないからだ」

「耀を……」

未佐が声を発したとき、すでにアムンの姿は消えていた。ハクリもいつのまにかいなくなった。

スクリーンを見上げると、そこにはスクリーンはおろか、壁もなかった。アムンの執務机と椅子も消えていた。

すべてがイリュージョンなのか、それともバーチャルなのか。彼女はひとり果てしなく広がる空間に残されていた。

耳の奥でアムンの言葉が響く。耀が「なにかを掴みかけている」と言ったアムンの声が気になって仕方がなかった。

アムンは耀の身体のことを知っているのだろうか。耀には父親がいないことを知っているのだろうか。そのうえで、自立への旅をつづけさせようとしたのだろうか。

それは年端のゆかない耀には厳しすぎる試練だ。彼女はそう思い、アムンに訴えようとしたのだ。だがすでにアムンは去っていた。

彼女はアムンが去っていった方向に目を向けながら、追いかけていってもう一度耀探しを訴えてみようかと思う。だが足が動かなかった。まるで強力な接着剤で貼り付けられたようだった。

未佐はアムンの強い意思を感じた。アムンはこの際耀を自立させようと考えているのだ。そして強いメンバーに養成しようとしているのだ。

未佐には耀がこの試練に耐えるか分からなかった。でもどうしても耐えてほしかった。だが耀が遠くへ行ってしまうようで寂しかった。

未佐はただ一人、アムンがそしてハクリも消えてしまった空間に、いつ

までも立ち尽くしていた。

8

「停留精巢……」

耀は頭の中で、同じ言葉を何度も繰り返す。だがなんのことか分からない。

外の空気を吸って幾分落ち着くと、彼はふたたび診療室に戻った。彼は自分に辜丸がないことを知って、それ以上のことを知ることが怖く、思わず診療室を飛びだしてしまっただった。

診療室の片隅で、彼は若い医師とママ木実子のやり取りにじつと耳を傾ける。

精巣は胎児のときに形成され、やがて陰嚢に下りて来るが、出産後も腹腔内に留まっていることがある。これを停留精巣というのだ。

「ぼくには辜丸がない……」

あの男のような辜丸がまだお腹のなかにあるというのだろうか。これから陰嚢に下りて来るのだろうか。一度手術が失敗すれば、二度と手術をすることができないのだろうか。

「天の組織」の一員となった耀にはもう手術なんか受けることができないのに、自分がまだ生きているかのように自分の身体のことを気になるのだ。これも自分の本当の姿を知るために必要なことか。

「これは遺伝性じゃありません……」

「では……」

「原因がはっきりしないのですが、最近、このようなケースが多い……」

「それは……」

「よく分かりませんが、ホルモンが……」

「ホルモンが問題だと……」

「ホルモン状化学合成物質……」

「……」

ママ木実子は医師との話が済んだのか、診療室を出ると、肩を落とし、前屈みの姿勢で歩き出した。

彼は先回りして家に帰ってもよかったが、いつもと違い幾分うなだれ気味のママ木実子が気になって後をつけていく。いや、いままで知らなかったことがつぎつぎに現れてくることに驚かされ、いささか興奮気味だったのだ。

ママ木実子は大きな建物に入っていく。彼が手術を受けた大学病院だった。

「ホルモンが胎児の性分化を決めるというのは本当ですか……」

「ヒトの場合、受精の段階で性別は決まります。ただ外性器は遺伝子情報だけですんなり決まらないところがあるんです。受精卵が胎児として発育していく過程で、外性器ははじめて男性器か女性器かに分化していくのですが、このときのホルモンレベルが決定的な役割を果たすのです……」

穏やかな目をした中年の医師は、ママ木実子をじつと見つめている。

成長すると男女別々の器官になるものでも、多くは胎児のときに共通に見られる組織から発達するという。

「ホルモンレベルですか……」

「そう。それも極微量な、まあ、微妙なというようなごく僅かな量でも……」

…

「このようなケースが多いとか、本当ですか……」

「最近環境にダイオキシンなどさまざまな内分泌攪乱化学合成物質が垂れ流されているので……」

「ダイオキシンだつて」

耀は叫んで、飛び上がる。

木実子は息をのみ、身体を固め、しばらくじっとして動かなかつた。

彼はじつとママ木実子の様子を見ていた。

9

耀はママ木実子がなぜ苦しみ、産廃処理場を執拗に攻撃し、焼却炉爆破に執着したのか、ようやく分かつたような気がした。

知らないことがいくつもあつたのだ。分からないこともまだまだ沢山残されているにちがいない。だがすべてを知るのだ。分からないことは分かるまで追及するのだ。

彼は覚悟を決めた。自立するためには、知りたくないことでも知らなければならぬことがあるのだ。

自分では男の子だと思っていたのに、精子をつくる肝心の睾丸がないのだ。腹腔に取り残された精巣（睾丸）は体組織のなかに埋没してしまい、やがて組織に吸収されてしまうのだろうか。

それはまるでいままでの自分だつたような気がする。埋没してしまわなために、自立して自分の存在をあらわにし、自己主張をしなければなら

ない。自分勝手な自己主張は本当の自己主張ではない。それはわがままなだけで、自分の存在を自覚した自己主張ではない。自己主張するには、まず、自己を確立して自分を客観的に見つめることができなければならない。

それにしても、人体でつくられることのない化学合成物質ダイオキシンが胎児の発育過程で器官形成に影響を及ぼすとは、なかなか理解することはできないことだつた。これまで開発（発明）された化学合成物質が、まさか人体固有のホルモンまがいの作用をおよぼすようになるとは誰も考えなかつたにちがいない。だが想定外などと言つてはならない。現実には現実だ。想定外をつくらないことこそ、化学合成物質の開発や発明に携わるものの前提でなければならないのだ。

技術開発において想定外があるというのは、当該技術をコントロールできないということだ。カネや名誉に目がくらんで、コントロールできない技術をつくり出したり、使用するようなことがあつてはならないのだ。

耀は自分を奮い立たせる。激しく奮い立たせなければ、自分自身が埋没して消えてなくなりそうだつた。

10

耀は先回りして、産廃処理場の煙が襲う家に戻つた。誰もいなかった。彼はリビングの窓辺に陣取つて、足を伸ばす。

「停留精巣か」

不意に、声となつて彼の口を突いて出た。一度頭にこびりついた言葉はなかなか消えないのか。彼は口元を歪め、苦笑する。

少年の声をした。

窓から隣のポーチが見える。ポーチでは高学年の小学生か中学校に入っただばかりのような小柄な少年が屈んで柴犬と遊んでいた。

「あ、お兄ちゃんだ……」

耀は懐かしそうに目を輝かせ、じっと見つめる。何度も遊んでもらった記憶が甦る。彼は堪らず、瞬間移動して少年の側による。

なにか気配を感じたのか、一瞬、少年は犬の頭に手を乗せたまま、顔を上げる。だがなにも見えないのか、すぐもとの姿勢に戻った。

「お兄ちゃん、耀だよ。ほら、一緒に爆弾をつくつたでしょ……」

彼は必死に訴えるが、聞こえないのか、見向きもしない。

姿が透明であれば、声も音を失うのか。彼は側でじっと少年の動きを眺めるほかなかった。

背後でガラス戸の開く音がした。背広スーツのほっそりとした色白の中年男が立っている。犬が近寄り、尻尾を盛んに振る。

「あ、お父さん……。お帰りなさい」

「ただいま。健ちゃん、夕飯はカレーにしようか」

「うん。ぼく、手伝うよ」

少年は立ち上がり、リビングのなかに入った。耀も後を追う、リビングの片隅に座り込む。

彼は中年男がお兄ちゃんの父親であることは知らなかった。何度かお兄ちゃんの家に上がり込んだことがあるが、家のなかには一匹の柴犬のほかにも誰も居ず、少年はいつも一人だった。

彼は誘われたわけではないが、いつの間にか二人は爆弾作りに熱中していた。爆弾といっても、花火の火薬を集めたもので、爆発力はせいぜいスプ

レー缶程度のものだったが、二人は産廃処理場を吹っ飛ばす大爆弾を作る意気込みだった。

少年が買いこんできた線香花火を二人で新聞紙の上で解体し、取り出した黒色の火薬を集めて茶筒に詰めた。そしてあの夜、彼は完成した茶筒爆弾を近くの産廃処理場の焼却炉に投げ込んだのだった。

リビングにつづいてキッチンがあつて、境の小さなガラス窓を開ければ対面式の流し台になっている。そのまえに幅の狭いスタンドが付いていた。

セーターに着替えた中年の父親が冷蔵庫から野菜を取り出し、スタンドに載せる。

「タマネギとジャガイモの皮を剥いてもらおうか。にんじんはそのままでもいいか」

「全部剥いちやおう」

少年はスタンドの横のテーブルに野菜を運び、新聞紙を広げてタマネギの薄皮を剥きます。父親もテーブルで包丁でジャガイモの皮を剥く。

「今日は、学校はどうだった……」

「午前中だけ」

「それで……」

「お母さんの日記を読んだ」

「そうか……」

少年の母親は数年前亡くなった。子宮ガンだった。気がついたときは手遅れで、余命六か月と言われた。一年程病床にあったが、それ以来、母直子は毎日欠かさず日記を書き、一人息子健一郎に残していったのだった。

「あの……」

「うん……」

父親は包丁を動かし、ジャガイモの皮を剥くのに余念がない。生返事の父親に、少年はちらつと視線を走らせる。

少年は剥き了えたタマネギを片手で遊びながら、しばらく口を閉ざしたままだった。

「どうした……」

父親は包丁の手を休め、息子を見た。

「うん……」

少年は口をもぐもぐさせる。父親はふたたび包丁を動かしはじめた。

「お父さん、あのね……」

「うん、なんだね……」

包丁を動かしたまま。少年はしばらくジャガイモの皮を剥く父の包丁の動きをじつと見つめていた。

「お父さん、お母さんは何で亡くなったの？ なにが原因で、ガンになったの？ どうして手遅れになったの？」

「……………」

父親はじつと息子の顔を見た。これまで何度同じことを聞かれたか。その都度、なんとかやり過ぎてきたが、息子の顔を見ているうちに、そろそろ本当のことを話したほうがいいのかとも思う。だが迷う。

「テイリュウセイソウって、どんなこと……」

「え？ なんだって……」

父親は大きな目をして、息子の顔をまじまじと見る。

息子は突然話題を変えた。なぜか。それともただ、母親の死亡の原因と停留精巢が関係しているかとも思っているだけなのか。

耀はリビングの片隅で、二人のやり取りを固唾を呑んで見守っていた。

母親が病気だったことも、そして亡くなったことも知らなかった。驚きだった。はじめから母親がいらないと思っていたのだ。そのうえ、突然「停留精巢」と聞いて、二度飛び上がった。

「お母さんの日記に書いてあったのか……」

まさか書き残しているとは思わなかったが、思わず口を突いた。

「うん……」

少年は平然としている。やはり書き残していたか。父親はしばらく息子の顔をじつと見ていた。

「停留精巢とは……、精巢が陰嚢に下降せずに腹腔内に留まっている状態をいう」

父親は抑揚なしで平板的に言う。

「精巢？」

「きんたま（睾丸）のことだ。健一郎に金玉があるだろう。さあ、タマネギを寄越しなさい。切るぞ」

父親はいつもより包丁に力を入れてまな板のうえの皮の剥いたタマネギやジャガイモ、にんじんを細かく切り刻む。早く、話題を変えたかった。

「ぼくは停留精巢だった？」

「……………」

父親は黙って、刻んだタマネギやジャガイモを鍋に入れる。

「ねえ……」

「健一郎の陰嚢には睾丸が二つあるだろう」

「うん、でも……」

「なんだ……」

死んだ妻は健一郎が停留精巢であることを気に病んでいた。それが産廃

処理場から流れてくる煙に含まれているダイオキシンのせいらしいと分かってからも、遺伝かもしれないと思いつづけていたのだ。そして自ら命を絶つてしまった。

「ここに手術の跡がある」

少年は目をぎらぎら光らせ、下腹部を指さす。

父親はいつもと違う息子の目を見て、椅子に座り直す。そしてしばらく息子を見ていたが、やがておもむろに口を開いた。

「そうだ。停留精巣だった。その跡はお腹の中に留まっている精巣を陰嚢へ降ろすための手術のものだ。幸い、うまくいったのだから、そのことはもう忘れなさい。そうするのが一番いい」

「でも……」

それでも停留精巣だった自分のことを気にしているのか、煮え切らない。

「あのね、オスカメスカの区別はその個体を作る生殖細胞の種類で決まるんだよ。精子を作るのがオスで、卵細胞を作るのがメスなんだ。精子は睾丸で作られる。お前にはその睾丸があるではないか」

人間の場合、性は卵と精子が受精した瞬間に決まるのだ。そして一生変わらない。ただ胎児の発育過程で、ホルモンバランスが乱れたりすると性器の生成や発育に影響し、染色体異常がなく、遺伝的には男でも、外見上尿道下裂など女性器をもって生まれてくることもあるという。肉体的に男性とも女性とも区別がつかないので半陰陽と言われてきたが、第三の性とも言われる。

このように、人間の性は、生物学的性に限っても、形態は多様であり、さまざまなレベルがある。このほか、さらに環境や社会的心理的なさまざまな要因に影響され、複雑多岐に分かれる。

「ホルモンバランス？」

「内分泌異常や外部からのホルモン類似の化学物質の影響でホルモン分泌が狂ったりしてバランスが崩れる……」

「ダイオキシンはホルモン類似の化学物質なの」

「ダ……」

ダイオキシンを知っていたのか。父親はうろたえ、半ば口を開けたまま、目を見開き、息子の顔を見る。

「お母さんがガンで死んだのはウソでしょ」

息子は追い撃ちをかける。目に不信の色があった。

「本当だ。手遅れになってしまった……。末期ガンだった。お前が停留精巣だということを悩んでいたことは事実だが、ガンがお母さんの命を奪ったんだよ……」

父親は潤んできた目を少年から背ける。いまにも嗚咽が込み上げてきそうだった。彼は立ち上がり、テラスへ出た。

息子の停留精巣も妻の子宮ガンも産廃処理場からの煙に含まれている高濃度のダイオキシンの原因らしいことが分かって、彼はすぐ転居を決意する。だが妻はようやく手に入れた思い出の詰まった住家から離れることを強く拒んだ。それに体力の衰えた妻には土台引越は無理だった。

「産廃処理場の煙が……、これが原因なら、なぜここに住みつけているの。早く他のところに越せば、お母さんも病気にならずにすんだ……」

背後から息子の声があった。

「そうかもしれない……」

父親は振り返り、息子の顔をじつと見る。母親似の面長の顔だった。

「ここにいれば、お父さんもガンになるかもしれないし……」



「お前のためにも早く転居したほうがいいのだが……、まだ踏ん切りがつかない。ごめんね……」

彼には妻との思い出の家を捨て、新しい家へ移ろうと気はどうしても起こらなかった。たとえどんなに危険が待ちかまえていようと、ここを離れる気になれなかった。だが健一郎のことを考えると、いつまでも自分勝手なことも言えないと自分に言い聞かせるほかなかった。

耀はリビングの片隅から身を乗り出して、じつと親子のやり取りを聞いていたが、隣家のガラス戸が開く音を耳にすると、すぐ立ち上がった。

11

「ヨウはまだか」

アムンだった。

「ええ、まだ、なんの連絡もありません」

未佐は口を尖らす。

「ミサはヨウのことが心配なんだね」

アムンは側の椅子に腰を下ろす。

「……………」

ミサは黙って頷く。

「ヨウはまだまだ帰る気にならないだろう。彼には知りたいことがまだまだあるだろうからね」

アムンには耀のこころのなかが分かるらしい。未佐はそんなアムンを嫉ましげに見るほかなかった。

未佐は耀が自分の身体のことを知ることよりも、彼女自身の身体のことを知られることを恐れていた。そのことを知ったとき、彼はどう思うだろうか。彼がどう思おうと事実は事実なのだが、なぜかしら、怖かった。まだ知られたくなかった。知られるなら、自分から知らせたかった。そんなことができるとは思えないが、彼女はずつとそう思っていたのだ。

耀がタイムスリップしたと聞いたとき、最初に恐れたことはそのことだった。知られる前の彼を連れ戻したかった。だができなかった。彼女は落胆し、どこかへ行ってしまったかった。

「ミサ、ヨウの分まで引き受けてほしい。『黒の集団』が虎視眈々と構えている。いつ闘いを挑んでくるかも知れない。つねに備えて置かなくてはならない。彼らは欲望に駆られて、いつ何時なにを仕出かすかわからないからね」

「はい」

「とにかく、彼らの欲望には限度がないのだ。彼らは膨らました風船がいまにも破裂しそうにパンパンなのに、さらに空気を吹き込もうとする。精一杯背伸びしているのに、さらに背伸びしようとする。彼らは常軌を逸している。彼らの気持ちが無分らない。一体、彼らはなにを考えているのか。彼らには風船が破裂することも、背伸びの果てに身体がふらつき、ぶつ倒れることも想像できないのか。確実に襲ってくるこのようなカタストロフィーを全然予見できないのか」

アムンは地球人はまるで自滅を目指しているようだという。

「たとえば、原子力だ……」

大量殺戮兵器の原子爆弾を作り、敵の都市へ投下した。一瞬のうちに一〇万人が殺戮され、都市は灰燼に帰した。間髪を入れず、同じことを二度

繰り返した。

第二次世界大戦の末期のことだ。広島と長崎だ。

原子爆弾は従来の火薬使う爆弾と異なり、人間のほかあらゆる生命体に有害な放射線を放射する放射性物質を大量かつ広範囲にばら撒く。そしてこれらの放射性物質は何年何十年それ以上にわたって放射線を放射しつづけるのだ。

このように危険な原子力でも、その膨大なエネルギーをなんとか利用しようとして原子力発電システムを開発し、原子力発電所をつぎつぎに建設していく。だが数々の小事故を重ねたうえで、ついに、スリーマイル、チェルノブイリ、そしてフクシマの重大事故を引き起こしてしまう。そして世界中に大量の放射性物質をばら撒き、広範囲にわたる放射能危険地帯が出現した。

それなのにまだ懲りない。地球人はやはり一日も早く自滅してしまうことを自ら希求しているのか。

「そんなことはないと思うけど……」

未佐はか細い声で呟く。

「とにかく、『黒』の連中が信奉している強いもの勝ちの新自由主義経済とやらは、世界は強いものものだとばかり、経済のグローバル化を推し進めて世界の富を掻き集め、独り占めしようというものだ。たとえ、短期的にはそれが可能でも、先はない。そんなことをつづけておれば、長期的には、自分で自分の首を絞めることになるのだ。それなのに、彼らは目先のことしか考えようとしない。短期的には利益最大化が可能でも、後は野となれ山となれではしようがないではないかね」

「彼らには長期的な戦略といったものがないのですか」

「彼らの長期的戦略といえるものは、短期的な利益最大化をできるだけ長く持続させようとするのだだろう。彼らのこれまでの行動から考えると、彼らは超地球人のごとくに振るまい、地球（自然）を奴隷のように支配するだけではもの足りず（いずれじり貧になるからでもあるが）、究極的には、地球人の多くを自分らの都合よい奴隷に作り替えてこき使い、とことん搾取しようとするんじゃないかと思うよ。強いものが弱いものをとことん奴隷のように支配する社会だ」

「そんなことが可能なんですか」

「可能でないことを願いたいが、連中はいま、人間改造を目論んでいるよ。自分たちは超地球人として他の地球人を支配し、従順な奴隷型ロボットの間に変えようとしているのだ。地球人口の一パーセントが残りの九パーセントを支配する構造だ。地球人類が自滅するといってもまだ先のことかも知れないが、困ったことに、このまま地球を彼らに任せておけば、地球人類が減ぶときには、他の生命体が道連れになり、地球の生物生態系もズタズタに分断されかねない。彼らにこんなことをつづけられては、地球の生物生態系が本当に台なしになってしまうのだ」

「なぜこんなことに……。どうして多くの地球人が気づかないのかしら」

未佐はわがことのように、気になってしかたがなかった。

「彼らはもちろん、多くの地球人がそのことに気づかないのは、目先の豊かさに目が眩み、地球の全体が見えなくなってしまうからにちがいない」

地球は、そして地球システムはひとつの全体として存在しているものだ。地球がバラバラに解体もせずに太陽の周りを周回しつづけているのも、宇宙の大きなシステムのなかで、重力と引力の作用のもとにあらゆるものが

相互関係を持ち、微妙なバランスを保ってひとつの全体システムを形成しているからだ。

「全体的把握ができないのは……」

「元を糺せば、彼らが信奉している科学技術のせいだ。現代文明の基礎となつていて現代科学技術が地球（自然）を支配できるとし、地球（自然）を分析して把握しようとしているからだ。大雑把に言えば、地球（自然）を細かく細分化して理解し、それを総計すれば全体となると単純に考えたんだ。地球（自然）を小さく部分部分に分けていけば非常に効率的に把握することができる。それだけ自然の全体像から離れていくのだが、総計すれば全体像を描けると決めているので（勝手に、そのような条件を設定した）、問題はないと信じていたんだ。だから、勝手に分野を細分化して数多くの専門分野が生まれ、それに応じてさまざまな個別科学が展開されていく。だがさらに問題なことは、いくら分野が細分化されたとしても網羅的なものではありえないし、また、個々の個別科学の発展や進歩度合も一致することはなく、跛行的でまちまちなことだ。これではたとえ個々を総計すれば全体像を描けると仮定しても、まちまちなものを総計してもいみがないだろう。それにもかかわらず、専門科学、個別科学はますます細分化して研究が進められていき、それに応じてますます全体が無視しされるようになっていったのだろう」

「それにしても、こんなに早く人類が滅亡するなんて……」

「個々人一人ひとりの力は小さいが、地球人は組織や制度を構築し、交通通信網を整備して、個々人を一つの組織体して巨大な力を生み出していった。力が大きければ大きいほど、得るものも大きくなるが、滅びるときも早いのだ」

「それで、『黒の集団』は日本でどんなプロジェクトをはじめようとしているのですか。人口を調節するプロジェクトですか、それとも、隷属化実験ですか」

「まあ、化学合成物質による人口調節じゃないかと考えているが……。もしかししたら、日本に自分たちの帝国の拠点をつくらうとしているのかもしれない」

「『黒の帝国』ためですか」

「アムンはじつと未佐を見た。だがその目は未佐の頭脳を通り越して遠い未来に向けられていた。」

「……………」

未佐は頭脳がきしきしと静かな音を立て、各ブロックが積み替えられていくかのように感じた。

「そうか。多分、そうにちがいない」

アムンがしきりに頷き、未佐を見た。

「……………」

未佐にはなんのことか分からない。

「ミサ、わたしはいままで、日本は彼らの実験場とばかり思っていたが、彼らは日本に自分たちの帝国建設の拠点を築こうとしているにちがいない。」

「彼らはここを拠点に世界制覇に乗り出そうとしているのだよ。彼らは自分たちの地球帝国を造らうとしているにちがいない。やつらは地球を『黒』の帝国にしようとしているのだ」

「アムンは目を大きく見開き、焦点のぼけた深淵のような底のない大きな目をミサに向ける。」

「ミサ、いま彼らが試みてようとしている人口調節や人間隷属化実験もそ

の一環にすぎず、これらはここに世界帝国建設の拠点を築くための作戦のひとつにすぎないのだ……」

アムンはミサの目に焦点を合わせる。

「彼らは日本を拠点に強者の世界をつくり、弱者を隷属化して地球を支配しようとしているのだ。そして経済のグローバル化はその第一歩だったのだ……」

アムンはミサをじつと見た。

「ミサ、いいかね。これをどうしても防がなければならない。すぐ対抗して準備をはじめなければ手遅れになってしまう」

アムンは立ち上がり、メンバーに招集の合図を送る。

## 第二章

12

耀が自分の家に戻ると、リビングに木実子がいた。出先から戻ってきて疲れたのか、彼女は虚ろな目をしてひとりテーブルの椅子にどっかりと腰を下ろし、頬づえをついてぼんやりしている。

耀は片隅で、彼女をじつと見た。なぜか、抱きつきたい気持ち湧いてこない。そばに寄りたいたいと思わなかった。いつの間にか、木実子との間に距離ができてしまったように感じるのだ。

彼の脳裏には、つい先程まで目の前にいた少年の父親が焼き付いて離れなれようとしなかったのだ。二人のやり取りが耳を突いて何度も木霊する。会話の内容ではない。男の子と父親という二人の関係が気になって仕方がなかった。

「ぼくにはお父さん（パパ）はがいないのか……」

二人の会話から推察すると、自分にも父親がいるはずだ、と彼は思うのだ。

「ぼくにはパパがいないなんて、そんなことはない」

どこかにいるはずだ。ではどこにいるのだろうか。

彼は木実子をじつと見る。この家のどこにも彼の父親がいるような気配は感じられなかった。彼女はリビングを独り占めして生活しているのだ。もう一人の男がいる余地はもちろんどこにもなかった。

いくら思い出そうとしても、父親らしい男を思い出すことはなかった。

彼には父親の記憶が存在しないのだ。

「本当に、パパはいないのか。でもぼくが生まれたのは……。やはり、パパはどこかにいるはずだ。ぼくのパパはどこにいるのだ。そして誰がぼくのパパなのか……」

木実子の耳元で大声で叫びたかった。

彼は木実子に近づき、大声で話しかける。彼女に直に問い質してみたかった。だが彼女は相変わらず頬づえを突いたままだ。彼女には息子の声が届かないらしい。

彼はなにか方法がないかといういろいろ考えるが、なにも考えつかなかった。彼はじつと木実子の顔を見る。彼女の唇が動いている。一人で話しているのか。それとも歌を口ずさんでいるのだろうか。彼は耳を澄ます。なにも聞こえなかった。

ふと、一体同化の術が思い浮かんだ。相手の身体に入り込んで、相手と一体になり、一体に行動する「術」だ。

もし彼女の身体の中に入り込むことができれば、彼女と話ができることができるかもしれない。たとえ直接会話を交わすことができなくともこのろのうちを知ることができないだろうか。

だが彼にはひとつの懸念があった。彼がいまいるところは過去だ。タイムスリップしたからといって、過ぎ去ったところではその時点での出来事が繰り返されるだけで、新たなことを加えることも削除することもできないのではないか。たとえ木実子の身体の中に入り込めたとしても、過去の彼女に係わる新たな出来事が生まれることも起こることも考えられないではないか。

耀はじつと木実子を見る。いまは目の前にいる木実子がすべてなのだ。

ここには彼女しかいない。ここには彼女のほかに、ひとの気配はなかった。ということ、ここにはいまパパはいないということなのか。彼は打ちのめされたような失望感を味わいながら、その一方で、まだ見ぬ父親に無性に会いたいと思った。

父親はどこにいつてしまったのだろうか。

突然、ドアホーンのチャイムが鳴った。

木実子が億劫そうにゆっくり身体を起こし、椅子から立ち上がる。

「はい……。一寸お待ちください」

彼は片隅で、木実子が戻るのを待つ。

木実子の後から、髪の毛の短い若い女と浅黒い顔の中年の男がリビングに入った。二人の男女はすすめられるままに、彼の目の前にあるソファに腰を下ろす。

「あ、お姉ちゃんだ……」

未佐だった。一瞬、懐かしさが込み上げてきた。彼は立ち上がり、未佐に近付き、回りをうろろしながら、隣に座っている男に目をやった。

「ああ……」

見覚えある顔立ちだった。まえに会ったことがあるような気がした。どこで会ったのだろうか。

男がひとりで喋っていた。そして喋り了えると、そそくさと立ち上がり、リビングを出ていく。木実子と未佐が後を追う。

耀はリビングにひとり取り残された。我慢できずに、ふたりの後を追おうとした。リビングのドアまで来たとき、ふたりが戻ってくる気配がした。

彼は急いでリビングに戻り、片隅に身を隠す。

ふたりはテーブルで紅茶を飲みながら、お喋りをはじめた。耳をそば立

てるが、声が低く、とぎれとぎれにしか聞こえない。

そのとき、ふと、浅黒い顔の男が浮かんた。

「あの男だ。ママと一緒にいた……」

彼は男を追おうと立ち上がる。

「わたしにはメンスががないの」

未佐の声がした。しばらくして、未佐が木実子の前で服を脱ぎはじめた。

「見て、わたしは半陰陽なの……」

見てはならないものを見てしまったような気がした。反射的に目を背け、彼はリビングを飛び出してしまった。

13

「議長、日本地区代表が別室に参りました」

秘書の声がした。

「うむ」

議長は手を伸ばし、執務機のうえのスイッチを押した。壁にスクリーンが現れ、カメラが別室の様子を映し出す。

別室の壁にもスクリーンがはめ込まれており、そこには議長の姿があった。執務室と別室とのやり取りは互いにスクリーンを見て行うことになっているのだ。

別室では、スクリーンに向って、ひとりの中年男が直立姿勢で立っている。光る目をした精悍な感じの男だ。

「マキです。なにかご用でしょうか……」

「産廃処理場焼却炉爆破事件が連続して頻発したそうだが、収束したのかな」

「どうにか収まりましたが……」

「男と女が関与していたらしいというが、彼らが犯人か」

「被害者の男がそう言うのですが、警察が彼らを一度捕まえたのに釈放してしまい、それきりになっています。警察が……」

「男と女はどこにいる」

「それが……」

「探したまえ。なにか企んでいるかもしれない」

「はい」

「常時監視するのだ。『天の組織』と関係があるかもしれない」

「はい」

「これから行う大きな仕事のまえに、ひとつの間違いも許されない。これらは綿密な計画のもとに実行する必要がある。計画通りにうまくいけば、ドミノ倒しのように、最後のゴールまで一直線だ。失敗すれば、最初からやり直した。いや、やり直しはできないだろう。失敗すれば、われわれは即終わりになる。ゆめゆめ、『天の組織』を侮るな。先刻も言ったが、今朝の『天の組織』の動きには注意するように。以上だ」

映像は消え、スクリーンは白い壁に戻った。

14

耀はどこか分からず、天空を彷徨いつづける。頭の中が真っ白になるか

と思えば、突然、真っ黒になるのだ。その都度、天空から垂直に急降下し、地面にぶつかりそうになる。だがそれも次第に収まり、彼は落ち着きを取り戻していく。

未佐が半陰陽であることは、自分が半陰陽である以上にショックだった。

彼はどうすればよいのか分からなかった。時間の経つのも忘れ、天空を彷徨いつづけるほかなかった。

タイムスリップしたことを後悔した。こんなことをしなければ、自分が停留精巣であり、未だに睾丸が下降せずに半陰陽の状態にあることも、また少年が停留精巣であったことも、未佐が半陰陽であることも知らずに済んだのだ。

ガラスの箱からがむしゃらに抜け出ようともがいた結果がこの始末だ。ハクリが言っていたように、行動の前に結果を予測するのだ。事前に予測し、それから行動するかしないかを考えるべきだった。

彼はこう考えながらも、この考えがどこかおかしいところがあるように思う。予測が完全ならいいが、果たして完全な予測が可能なのか。

可能なかぎり徹底して予測を試みようとも、人間には完全な予測は不可能だ。それでも可能なかぎり完全なものに近づけようとする努力は放棄すべきではないだろう。

そうだとすると、今更済んだことをあれこれ考えたところで、元に戻ることはない。ひとはそれぞれの置かれている状況で、自分で一番だと思ふことを可能な範囲で行うしかないのだ。

彼はいささか開き直り、ようやく、未佐のことも、少年のことも、そして自分のことも、事実は事実として受け入れるほかないのだと思つた。くよくよ考えてみたところで、事実が事実でなくなることはないのだ。

一瞬、全身に戦慄が走った。不意に、ほっそりとした色白の中年男の姿が脳裏に浮かんだ。忘れていたが、少年の父親だった。

なぜ、少年の父親が突然現れたのか分からなかった。だがこのために、未佐のことですっかり忘れていた父親探しが彼に甦ってきた。

彼は自分の父親についてあれこれ考える。父親はどんな男だろうか。少年の父親に似て、ほっそりとした中年男だろうか。それとももっと背が高く、がっちりしたタイプだろうか。背が低くてでっぷり太っていたらどうしよう。

ふと、不安が脳裏をかすめた。本当に父親はどこかにいるのだろうか。彼は少年と父親の関係を目にするまで、父親という存在に気がつかなかったのだ。それゆえ、父親という存在を知っても、実感はなかった。というより、父親とはどういうものか実感することができないのだ。

彼には父親と遊んだ記憶が全然なかった。すでに、父親は死んでしまったのかもしれない。

彼はふと、父親がいなければいなくてもいいと思った。でもいるはずの父親がいらないということは寂しかった。なにか物足りないのだ。

かといって、父親がいるような気がしないのだ。彼の頭のどこかに、もしかしたら、自分には父親がいなくてもいいかもしれないという思いがあった。

なんとかして、この思いを完全に払拭したかった。だが時折、思い出したようにひよいと顔を出すのだ。その都度、彼は激しく頭を振った。

何度もこんなことを繰り返しているうちに、彼はようやく父親のことを木実子に質してみようと思ったのだ。

15

「議長、産廃処理場爆破事件の容疑者男女の居場所をつき止めました。現在のところ、『天の組織』とも没交渉のようですが、監視をつづけます。以上、お知らせします」

日本地区代表からの報告だった。

議長は壁に目を移す。執務室のスクリーンには湖畔に建っているこじんまりとした一軒家が映し出されていた。前面に湖面が広がり、背後には鬱蒼とした森林がつづく。

議長は風景をしばらく見惚れていたが、前触れもなく画面は容疑者男女の顔写真に変わった。

「あ……」

議長の口から短い声が漏れた。

「議長、なにか……」

聞き咎めたのか、スクリーンのスピーカーから、日本地区代表の声が出た。一瞬、スクリーンの片隅に映った日本地区代表の目が異様に光った。

「うむ……。この女には子はいないのか」

「調べてみます。現在分かっていることは……」

日本地区代表は容疑者男女を捕らえようとしたときのことを詳しく報告する。

概要はつぎのようなものだ。

連続産廃処理場焼却炉爆破事件の折、容疑者男女は捕らえられ、ミノムシ状にロープを巻かれて柱に吊るされたが、廃材の山の爆発で空中に飛ばされた。空中の二体の「ミノムシ」はそのまま宙を飛んで行き、近くの大



きな湖の湖畔に着地した。その知らせを受け、急遽ヘリコプターを派遣し捕まえようとしたが、「天の組織」に邪魔され、余儀なく引返したというのだ。

「そのとき、なんでも若い女と男の子が手助けをしていたらしいという報告がありましたか……」

「男の子か……。その子の写真はないか」

議長は一瞬全身に戦慄が走るのを覚えた。

「早速、手配いたします。しばらく、猶予願います」

日本地区代表がスクリーンの映像とともに消えた。

議長は執務机でしばらくじっとして動かなかつた。だが頭の中は凄いいろでぐるぐる回転していた。大粒の汗がこめかみを流れ落ちる。

彼は黒の尖り帽子をかなぐり捨てて。喉元のボタンを外し、大きく息を吸う。

スクリーンのスイッチに手を伸ばし、オンにする。

スクリーン一杯に女の顔が映し出された。どこか見覚えのある顔立ちだった。

彼は引き出しの奥から鍵を取り出すと椅子から立ち上がり、執務室の壁に並べてあるキャビネットの扉の鍵を開ける。扉のなかには二段の大きな引き出しがあった。彼は下の引き出しを引いて、奥から分厚いファイルを取り出す。

ファイルを持つて執務机に戻ると、彼は素早く一枚一枚捲りはじめた。

ファイルの各ページには大きな顔写真が貼付され、その下にデータが書き込まれているが、なぜか多くの顔写真には大きなバツテン印があった。

彼の手が止まった。その顔写真にはバツテン印がなかった。

「やはり、そうだったか」

開いたページの顔写真は見覚えがあると思ったスクリーンの顔に間違いはないと思った。データには国籍が日本とある。なぜ日本の女性なのか、彼には意外だった。

彼は若いころ、一時、ボランティアでAID（非配偶者間人工授精）のドナー（精子提供者）となったことがあった。別に、深く考えたわけではなかったが、自分の子で世界中を埋め尽くせたら面白いと思い、誘いに乗ってドナーになったのだ。だがあるとき、彼はなぜか急に地上に自分と似た子が一人でもいることに耐えられなくなって、彼の精子の提供先を徹底的に調べ上げたのだ。ファイルの顔写真は彼の精子の被提供者のものだった。

そのとき以来、彼の子は、なぜか夭折の運命にあった。将来、意に反して生を受けた自分の子が彼に背き、彼を亡き者にするかもしれないことを恐れ、密かに、彼が抹殺したらしいという噂が囁かれた。

彼は被提供者の子が亡くなったことを知ると、当該顔写真にバツテン印を書き込んでいった。バツテン印の顔写真が年を経るごとに増えていった。ようやく、殆どがバツテン印になった。だがバツテン印のない顔写真が二枚残っていた。そのなかの一枚が産廃処理場爆破事件の容疑者（女性）の写真によく似ているのだ。

彼はスクリーンの顔写真をじつと見る。悔いが込み上げてきた。

提供先が日本国籍の女性までにおよんでいたことを知ったとき、彼は密かにワールドワイドになったことを喜んだが、いざ、抹殺しようと思ったとき、逆に大きな障害となった。手を尽くして探しても、なかなか見つからなかった。それがいま、思いがけず、掌中へ転がり込んできたのだ。

「議長、日本地区代表からです」

インターホンから秘書の声がした。

「うん……」

彼はスクリーンを切り替える。日本地区代表の精悍な顔が大写しとなった。

「議長、分かりました。女は三八歳のとき、確かに男子を出産しておりませんが、その子は一年ほど前に近くの産廃処理場爆破事故に巻き込まれて死亡したそうです。当時の新聞にもそのことが報じてありました。容疑者男女の監視をつづけます。以上です」

「ありがとうございます」

短く応え、議長はスクリーンをオフにする。開いてあるファイルを手前に引き寄せ、しばらく顔写真を眺めていたが、マジックペンを取ると、大きなボタン印を付ける。それから、ファイルを閉じると、彼は大きな息を吐いた。

もう一枚未解決のものが残っていたが、彼はなんとなく大きな仕事を終えたような気分誘われた。執務機の椅子に深々と腰を下ろし、背を押し付け、足を伸ばして机に載せ、目を閉じた。

彼の脳裏にこれまでボタン印を付けてきた顔写真がつぎつぎに去来する。一枚残っている写真はかなり古いものだった。いくら探しても被提供者が見つからず、大分前にすでに解決済みとして処理していたものだった。それだけに今回解決した一枚は彼にとつて最後の一枚に匹敵するものだったのだ。

鼻歌でも歌いたい気分だった。だが彼は冷酷なまで見える無表情な顔面を変えることはなかった。

突然、音がした。足を伸ばした拍子に、机のファイルが床に落ちたらし

い。

彼は目を開け、机から両足を降ろした。足がファイルの上にかかる。彼は身を起こし、足元を見た。

落ちた拍子に開いたのか、開いたファイルが足元にあった。開いたページの顔写真がボタン印の間から彼を睨んでいた。

なぜか、ふたたび、彼の全身に戦慄が走った。しばらくじつとして、戦慄が収まるのを待った。

息を整え、彼は身を屈め、ファイルを拾う。

顔写真はつい先程ボタン印を書き込んだものだった。彼は急いでファイルを閉じ、立ち上がるとキャビネットの扉を開け、引き出しの奥へファイルを押し込んだ。

なんとなく、不吉な予感がした。彼は再度ファイルを取り出し、顔写真を確かめる。変わったところはなにもなかった。ファイルを静かに閉じると、そつと持ち上げ、引き出しのなかに収めた。扉を閉じ、嚴重に鍵をかける。

議長は大きく息を吐いた。

16

耀は早回しを試みる。場面が刻々と変わり、時間が過ぎていく。だがなんとまどろっこしい。彼はもう一度タイムスリップを試みようかと考える。

現在に戻る一步手前にタイムスリップするのはどうだろうか。だがタイ

ムスリップしても時間がないのが問題だった。時間が来てタイムスリップが終了して、過去から現在に戻ったときに何が起こるか分からなかった。

そのときには自動的に出発点に戻るのだろうか。それとも、そのまま、現在に留まることになるのか。だが彼にとってそのどちらも問題だった。

彼は木実子に父親のことを尋ねることを止そうかと思った。父親は誰かと尋ねても答えてくれるか分からない。それよりも、彼が生まれるまえにタイムスリップして彼女の行動を追うほうがより確実かもしれない。かといって、タイムスリップした時点からそこで過ごした時間も考慮しなければならず、これらを考えると、正確な時間を設定することは難しい。だが彼はとにかくタイムスリップしてみようと思ったのだ。

彼は二年前にふたたびタイムスリップする。時間の設定もいい加減だった。三度目のタイムスリップだった。最初は一〇年前だったか、二度目は五年前に戻ったはずだ。今度は二年先スリップしたのだ。これで彼は自分が生まれる前にタイムスリップすることになった。そしてふたたびリビングに放り出された。だが彼自身何年前になるのか正確には分からなかった。

「お母さん、わたし、こどもを産むわ。ここで生んでもいいわね」

木実子だった。テーブルに向かい合って座っているのが母親の貴世か。

彼は親子が話しているリビングにタイムスリップしたらしい。彼は片隅でじつとふたりを見守る。

「どういう了見なの。結婚もしないでこどもを産むなんて……」

「いま産まなければ、もうじき産めなくなるわ」

「結婚が先……。早く、結婚すれば……」

「また、それを言う。そんなに簡単ではないの、結婚なんて」

「じゃ、こどもは生まれない」

「こどもはいくらでも産めるわ。AIDもあるし……」

「AID?」

「『非配偶者間人工授精』のこと」

人工授精には配偶者間の人工授精(AIH)と非配偶者間の人工授精(AID)とがある。AIDではドナー(精子提供者)の精子を注射器のような器具を用いて子宮に注入する。

「まあ……」

「なでもないことよ。ひとりのほうがさっぱりして、かえっていいわ」

呆れ返ったのか、それとも話しても無駄と思ったのか、貴世はそれつきり口を開こうとしない。

「AID……。AIDのドナーがぼくのパパなの……」

耀の耳にはふたりの話し声が入らなかった。彼は口の中で「AID、AID……」と叫びながら、リビングから外へ出た。

彼は肩を落としてとぼとぼ歩く。AIDという言葉が頭から離れなかった。

どのくらい歩いていたのか分からなかった。ただ歩いて歩いて歩いた。

そしてようやく彼は木実子に尋ねるほかないと思った。

彼は危険を省みず、あてずっぽうに時間を設定し、現在に極近い過去へふたたびタイムスリップを試みる。

なく広がっている。大きな湖の湖畔だった。

側に、耀と未佐がいる。タイムスリップしてきた彼はふたりに近寄る。

「耀ちゃん、基地へ戻らなければならぬわ」

未佐だ。アムンからの帰還命令がきたという。

間もなく、未佐が耀の手を引いて、天へ向って翔だした。

タイムスリップしたばかりの彼は訳がわからず、黙ってふたりに見送る。

ふたりの姿が次第に小さくなっている。視界から消えた。

湖水がさざめき出した。湖面を吹く風が彼の頬を撫でる。

記憶が甦ってきた。

未佐と耀が一体の「ミノムシ」を曳いて湖畔に着地したとき、突然ヘリ

コプターが現れたのだった。「黒の集団」だった。

一瞬、彼は不意に「黒の集団」に襲われたような錯覚を覚えた。あのと  
きと同じように、彼は近くの藪のなかに身を隠す。

藪のなかに、じつと息を潜める男と女がいた。女の髪は乱れ、やつれた

顔も煤で汚れ、一瞬誰か分からなかったが、木実子だった。隣にいる男も

見覚えある顔だった。

足音や人の乱れる声が近づき、車のエンジンの爆発音と車輪の軋む音が

接近してくる。だがそれらの音も次第に遠のき、やがて消えた。

じつとしていたふたりはいつの間にか眠りに落ちていた。彼も思わず、

誘われて眠りに落ちていく。

何時間眠っていただろうか。辺りはしーんと静まり返り、そばで眠って

いたふたりの姿はなかった。彼はとてつもない時間眠っていたような気が

する。

藪の隙間から周りを見回す。湖畔に人影があった。後ろから近付くと、

浅黒い顔のあの男だった。一度未佐と一緒に訪ねてきた男だ。木実子と産  
廃処理場焼却炉爆破で行動をとりにした男だった。男は同じ姿勢で、何時  
間もじつと湖面に目を向けている。

暮れかかったころ、一台の車が近付いてきた。見覚えのある車だった。

男が立ち上がる。車の窓が開いた。木実子だった。男は車に乗り込んだ。

車が動きだした。

彼は後を追う。湖畔にある古びたこじんまりとした一軒家のまえに止まっ

た。白ペンキ塗の外見は、一見瀟洒な感じを与えるが、近寄るとペンキは

剥がれ、いたるところに黒カビが広がっていた。長い間、空家になってい

たらしく、人の住んでいる気配が全くなかった。

男がドアに近づき、ノブを引いた。ドアが開いた。振り向いて、木実子

を呼んだ。男につづいて、女がなかに入っていく。彼もつづく。

突然、後頭部を殴られたような衝撃を感じた。彼はその場にしゃがみ込

む。

一瞬、なにが起きたか、分からなかったが、身体が急に重くなったよう

な気がした。

タイムスリップがリセットすれば、タイムスリップの出発点のものと場

所である「天の基地」に戻るはずだ。彼は周りを見渡した。「天の基地」

で閉じこめられていたガラス箱はないし、周りにはなにも変わっていない。

とすると、もしかしたら、タイムスリップの時間が過ぎ、自動的に過去か

ら現在へ次元が転換したのかもしれない。彼は恐る恐る身を起こし、家の

片隅に身を寄せ、丹念に辺りをもう一度見回す。

ドアから家の中に入ったとき、室内は薄暗く、突然闇のなかに放り込ま

れたようだった。だが次第に目が慣れてきたのか、それとも窓のカーテン

を開いたせいか、夕暮れの淡い光が射し込み、内部の様子が次第に鮮明に見え出す。

北側の玄関から入ると、吹き抜けのある大きなリビングがあつて、これがこの家の中心であつた。湖に面している南側に大きな天窓と四枚の大きなガラス戸があつて、前面にベランダが広がっている。東側には二つのベッドルームが並び、南西の角にはこじんまりとしたキッチンがあつた。トイレや洗面所、風呂は玄関側に集中し、キッチンのある西側にもベランダがあつた。

ふたりは窓やガラス戸を開き、風を入れ、掃除をはじめた。

彼はベランダに出て、ぼんやりとふたりの動きを眺めた。甲斐甲斐しく働く木実子を見てみると、なんとなく嫉ましく感じる。だがまるで別世界の出来事のような違和感があつた。

彼は迷いはじめた。あの男は木実子とどんな関係なのだろうか。まさか自分の父親じゃあるまい。それにしても、男のいるところで、木実子とAIDについて話すことも、父親が誰であるかを尋ねることも、気が引けるし、気が重かつた。

もし、AIDで生まれたとしたら、父親を特定することは難しいのではないか。精子を提供するドナーは大体ボランティアが多いというし、多くの場合、素性や個人情報も明らかにされることはまずないのだ。

それでも自分のドナーは誰なのか見極めたいというのか。彼は迷う。秘密の高いハードルを乗り越えて、たとえ、ドナーをつき止めたとしてもそれでどうなるというんだ。多分、木実子も知らない情報をえたところで、これからの人生（もしあるとしても）がどう変わるといふんだ。

とはいっても、自分の父親は誰か、誰の子か、気になる。父親が分から

ない状態に置かれているのも、なんとなく落ち着かないものだった。

「一体、ぼくは誰なのだ」

彼はひとりベランダに出た。視線を湖水に移し、ぼんやりと湖面に映る残照を見とれていた。

対岸で小さな光が動いた。光は一軒家に向けられている。何者かが監視しているにちがいない。彼は急いで家の中へ入り、身を隠して対岸を窺う。

一瞬、耀と未佐を追ってきたヘリコプターが頭に浮かんだ。

対岸の光は「黒の集団」のものか。

対岸までの距離は数一〇〇メートルはあるだろうか。掃除中のふたりはなにも気づかないのか、湖に面したベランダのガラス戸は開放したままだ。

遠く離れているとはいえ、家の中は丸見えの状態だった。

彼はカーテンを引きたかつた。彼が木実子に近寄っていく。

そのとき、細い光線が飛んできた。咄嗟に身をくねらせ、光線を避ける。

やつらは透明な彼を認識にする装置を備えているにちがいない。ここには木実子が危ない。ふたりも標的にされるにちがいない。

彼は過去へ逃げ込もうと、もう一度、タイムスリップを試みた。

18

「ミサ、ヨウは見つかったかね」

アムンが近付いてきた。

「一度見つけたのですが、彼はまたタイムスリップしたのか、行方不明になつてしまいました」

耀のことが気になって仕方なかった。そんな未佐をアムンがじっと見ている。

「……………」

「一度、現在に戻ったようです。それで、彼の姿を捉えることができたらしいのですが……………」

「どこで……………」

「産廃処理場爆破事件のとき、最後にいたところの近くです。『黒の集団』の襲撃を受けた…………、そのときは帰還命令を受けて基地に戻りましたが……………」

「あの湖のあるところかね」

「ええ、湖畔にある古びた一軒家のようでしたが……………」

「あと、なにか変わったことは……………」

「耀が慌てて逃げ出すようにしていましたが、どうしたのでしょうか」

「うむ…………、もしかしたら、『黒の集団』と遭遇したのかもしれない」

「アムンは宙の一点にじつと目を据え、考えているようだった。」

「ミサ、これからそこへ行つて、付近の様子を探ってください。『黒の集団』が動き始めているようだ。もしかしたら、一軒家にいる人たちに危害がおよんでいるかもしれない。十分注意するように」

未佐は先刻からうずうずしていた。彼女はすぐ飛び出す。アムンは笑みを浮かべ、見送る。

彼女は一軒家にいるふたりを案じていた。アムンには黙っていたが、ふたりが森野と木実子であることは分かっていた。気が気でなかった。彼女は自分の胸のうちをアムンに見透かされていることに気づいていたが、そんなことはどうでもよかった。

彼女はスピードを上げていく。

19

「議長、容疑者男女の家に入っていくひとりの男の子を発見しました。写真撮ることができましたが、逃げられました。どこへ行つたのか、不明です。その男の子は『天の組織』の一味らしいのですか、詳細は調査中です。以上、ご報告いたします。日本地区代表」

議長は日本地区代表からの報告を何度も読み返す。その度に、なぜかな胸騒ぎを覚える。最初はほんの軽い違和感を覚える程度だったが、それが水面に広がる波紋のように、次第に胸一杯に広がっていくのだ。

一体、なぜか。

「日本地区代表に、湖畔の一軒家で撮ったという男の子の写真を送るよう連絡してください」

議長は秘書に命じる。

男の子はあの女が産んだ子なのだろうか。確か、女が産んだ子は死んだと言ってきたはずだが、まだ生きているのだろうか。もし、あの子が生きているとしたら…………。

一瞬、時折目を異様に光らせることがある日本地区代表の精悍な顔が脳裏を過つた。

あの男の目の異様な光はどこからくるのか。あの目の光はただごとではない。鋭い直感の現れか。もしかしたら、男の子の写真を送れと再度請求したことで、日本地区代表はなにかを感付いたかもしれない。

議長は、不用意に、男の子の写真を送れと行ってしまったことを後悔した。あの男が変な動きをはじめれば厄介なことになる。議長は事前に芽を摘むべきか、迷う。

日本に帝国を築くには、その要となるのが日本地区代表なのだ。議長と日本地区代表が一心同体とならなければ、この大事業を達成することは不可能だ。それだけに、この時期に、二人の間に一寸の齟齬や疑念を挟む余地があつてはならないのだ。

議長は自らの落ち度を棚に上げ、日本地区代表の処置をあれこれ考える。

20

耀は広大な草原に放り出された。見覚えのある風景だ。最初のタイムスリップのときの降下地点だった。

彼は腰を下ろし、しばらく周りを見回す。「黒の集団」と思しき追手から慌てて逃げ、思わずタイムスリップしてしまったが、最初と同じボタンを押してしまつたらしい。

彼は湖畔の一軒家に残してきた木実子たちふたりのことが気になった。あれは確かに「黒の集団」だった。今ごろは、やつらは一軒家を襲い、ふたりを捕らえているかもしれない。

あのとき、「黒の集団」かどうか確認せずに、なぜ逃げだそうとしてしまつたのか。「黒の集団」と敢然と立ち向かい、なぜ戦おうとしなかつたのか。

だが彼は、咄嗟に、「黒の集団」にちがいないと思い、姿を消すことし

か考えなかった。敵のターゲットは自分で、そこにいれば木実子たちふたりに危害がおよぶのではないかと思つたからだつた。

もし勘違いだったらどうしよう。彼はタイムスリップをリセットして、ふたりが安全かもう一度確かめようかと思つた。

彼はリセットボタンに人さし指を置いた。

そのとき、ふと、リセットすれば、一軒家ではなくて、「天の基地」へ戻ってしまうかもしれないという思いが頭を過つた。彼は一瞬迷う。「天の基地」へ戻つたら、これまでのことを報告すればいいかと思う。

リセットボタンの上の人さし指に力を入れて押そうとした。そのとき、未佐の顔が浮かんだ。頭が殴られたような衝撃を覚えた。反射的に、彼は人さし指を引つ込めてしまう。

彼はリセットボタンから目を離し、おもむろに立ち上がると、もう一度辺りを見回す。草原が広がり、遠くに山並みが見える。

はじめてタイムスリップしてときのことを思い出した。

そうだ。あのときは確か、一〇年前へのスリップを設定したのだった。すると、今回も一〇年前への設定してしまつていたのか。

彼は必死に最初のときのことを思い返す。

あのとき、草原からママに会いたいと思い、まえに木実子が働いていたらしい高層ビルが立ち並ぶ都会へ飛んだ。だが彼女に会うことができず、そこで彼は生れた後の世界へ再度タイムスリップを試みたのだ。そして子守歌を歌う祖母貴世に出会い、そして木実子に会つたのだった。

彼にはあのときのように、もう一度、五年前にタイムスリップする気はなかつた。同じことを繰り返してもはじまらない。それよりも、彼は自分が生まれるまえの木実子を追跡しようと思つた。そうすれば、木実子が自

分をどのようにして知り、自分がどのようにして生まれることになったのか、詳細に知ることができるとはではないか。

一瞬、木実子がAIDのことを母貴世に話している場面が浮かんだ。彼は記憶を頼りに、祖母貴世の家探しをはじめた。

21

「議長、なにかご用でしょうか」

日本地区代表は議長に精悍な顔を向ける。その顔には不安そうな陰りがあった。地区代表が議長の執務室に呼ばれることは滅多になかった。

議長は目を上げ、日本地区代表を一瞥する。控室に待せている間に、どこか変なところがないか、綿密にチェックしていたが、議長は再度男に目を光らせる。

男の子の写真はどうでもよかった。一度日本地区代表を呼んで、直に、チェックしておきたかったのだ。

「日本にわが帝国の拠点を築く件だが、これについて日本地区代表の意見を聞いておきたいと思つて呼んだのだ」

「意見を言う立場にありません。議長の命令を忠実に実行するのが、わたくしに課せられている任務と思えますが……」

「うむ」

一瞬、議長の目が光る。まあいいかというように、一息吐いて、つづける。

「……だが今回のプロジェクトは簡単なものではない。きみはわたしの補

佐をして、成功に導いてほしいのだ。これまでの実験は……」

「できれば、これまでの実験結果を帝国の拠点造りにつなげることができればと思えますが……」

「ほおう……、どうするのだ」

「議長がどのようにお考えなのか……」

「かまわん。きみの考えを言ってみたまえ」

「従来のように、その国の軍部に働き掛けてクーデターを起こさせるか、あるいは反対勢力を手懐け、武器を与え、武力を用いて傀儡政権を樹立するのがもっとも手っ取り早い方法かもしれませんが、今回のプロジェクトが全世界を視野に入れて行うのであれば、そのような暴力的方法は妥当性を欠くといえましよう。先進国や開発途上国、あるいは富裕国や貧困国といったさまざまなレベルの国々が共存する全世界において、そのような方法が全体に共通して通用するものとはいえないからです。ではどのような方法が考えられるのでしょうか……」

日本地区代表は一息ついて、議長を盗み見する。議長がなにを考えているのか読めないのか、しばらく口を噤んでいた。

「つづけたまえ」

議長は相変わらず、無表情だった。

「はい。結論から申しますと、日本に地球帝国のための拠点を効率良く建設するには、まず権力機構の植民地化を図るのが得策かと思えます。これにはソフトとハードの両面からのアプローチが必要かと思えますが……」

「その『権力機構の植民地化を図る』とはどういうことか」

「この国はいま、方向性を見失い、社会そのものが極めて硬直化しています。旧来の権力機構が権力を牛耳るようになって、ますます既得権益擁護



に走り、かつての格差の少ない平等的な『総中産階級』指向の柔軟な社会から、格差の拡大する硬直的な社会へ急速に変わってきているのです……」

「ほおう……」

「いまや、この国も一パーセント対九九パーセントの社会となつてしまいました。これは申すまでもなく、一パーセントの富裕層対九九パーセントの貧困層ということですが、その富裕層が権力を握っているのです、この政治経済システムは富裕層がますます富裕になる構造になっているのです」

「『一パーセント対九九パーセント』ね。それで……」

「国を支えるはずの『一パーセント』がこの為体ですから、ここをターゲットにして攻め込めばいとも簡単に攻略できるのじゃないかと思えます」

「ふむ。それが『権力機構の植民地化を図る』ということかね」

議長はじつと日本地区代表の顔を見ながら、下部組織の世界戦略研究センターから上がった「日本報告書」を思い浮かべる。

日本では立法府である国会は二世三世の世襲議員が大半を占め、飽きもせず日々政争に明け暮れ、利権を求めて奔走し、行政の官僚たちは国益よりも自分たちの省益第一とばかり、平気で国民の財布に手を突っ込みかき回す。表立った汚職や権力の乱用はなくとも、ますます巧妙に立ち向かい、権益擁護に明け暮れ、腐敗し墮落した彼らには倫理観もなければ、憲法を遵守する気持ちも愛国心もない。一方、この国の高度成長を支えた大企業にもかつての勢いはない。円高だと言つては国に泣きつき、税金が高いと文句を言い、派遣社員を使い捨て、正規社員を徹底的にこき使い、コストコストとけちりにけちつてたっぶり資金をため込んだ大企業はさつきと国を見捨て、安価な労働力を求めて海外へ去る。少子化高齢化が進むなかで、若年層は雇用の機会も失われ、たとえ正規社員となつても企業に骨

の髓まで貪り食われた果てに、失業者として放り出され、ホームレスとなつて社会の底辺で蹲る。都会には失業者が溢れ、社会には不満や絶望感が鬱積し、閉塞感に包まれ、社会は窒息状態にある。

このような分析につづいて、つぎの結論があつた。

「この国の政治、経済、社会にはかつての『日が昇る』ような勢いのあるものはなにもなく、その構造は時代遅れで、極めて脆弱、まさにドミノ倒しの状況にあるといつても過言ではない」

議長はしばらく目を閉じていた。しばらくして目を開き、日本地区代表に目を向ける。その顔から陰りが消えている。議長は目を見開き、もう一度、日本地区代表をじつと見る。それから、おもむろに口を開いた。

「実験の方はいままで通り進め、成果を報告するように。好ましい成果が出れば、つぎの段階へ進めることになる。権力機構への働きかけはこれまでも多々行つてきているが、それらは当分従来通りとし、『植民地化』のための新たな攻略活動については、追つて詳細を伝える。ご苦労であつた」

日本地区代表は深々と一礼すると、執務室から出ていった。議長はドアが閉じるまで、椅子のうえで身動きひとつせず、去り行く男の後ろ姿をじつと見守つていた。

22

耀は記憶を思い返し、祖母貴世の家を探すが、なかなか見つからなかつた。それもそのはず、なにしろ、彼が生まれるまえのことだ。彼が生まれ

る前にタイムスリップしているのに、彼は多分彼が生まれてから過ごした家と同じところに建っている同じ家だと決め付けていたが、もしかしたら、ここはまだ住んでいなかったかもしれないし、別に新しく建て直しているいるかもしれないのだ。

彼は見覚えのある風景を頼りに場所を絞り、似た格好の家を探す。そしてなかを覗く。とにかく、どこかに祖母貴世が住んでいるはずだった。

家が見つければ、そこから少しづつ廻ればいい。そしてママになるまえの木実子をつかまえるのだ。彼はこんなふうを考えていた。

だが祖母の家はなかなか見つからなかった。

彼は途方に暮れて、五年後へタイムスリップしてしまう。

彼は一瞬時空を飛んだかと思うと、ふわりと地上に下りた。見覚えあるリビングのなかだった。

赤ん坊が哺乳瓶から人工母乳を吸っている。彼は一時、赤ん坊の口元を見惚れていたが、気を取り直して、そこからさらに先へ小刻みにタイムスリップしていく。

五年より僅か先の過去の時点へタイムスリップした。その時点から過去の再生が現在へ向ってはじまるのだ。

たとえば、五年前にタイムスリップすると、その時点から四年前、三年前と現在の方向へ時間が流れていく。だから、過去へタイムスリップしても、時間の流れはさらに過去へ進むのではなく、逆に、現在へと向うということだ。

赤ん坊が消えた。お腹の大きい木実子と祖母貴世がリビングのテーブルで向かい合っている。

もつと前だ。彼はさらにタイムスリップを試みる。

木実子のお腹も小さくなった。妊娠初期だ。

だが木実子の妊娠の前でなければ、受精（受胎）の過程を捉えることはできない。

彼は小刻みにタイムスリップを繰り返す。

決定的な瞬間が間近に迫る。

だがこんなにも何度もタイムスリップしては、リセットしてもどこへ戻るか分からなかった。果たして「天の基地」へ戻ることが出来るだろうか。

一瞬、不安が過る。それでも彼は自分がどのようにして生まれたのか、自分の父親は一体誰であるのか、知りたい一心だった。

木実子は実家を出て、勤務先の研究所に近いところに小さなアパートを借りて移り住んでいる。母親からの独立ということもあつたのだろうが、表向きは仕事が忙しくなつて、郊外にある実家から研究所へ通うのが時間的に難しくなつたからだった。

アパートは六畳ほどのワンルームだけで、それに申し訳のような小さなキッチンとバストイレが付いている。

時間が前に向って流れていく。彼は部屋の片隅にじつと腰を下ろして、木実子の受胎の時期をいまかいまかと待った。

## 23

アムンはミサを送りだすと、執務室に戻り、机一杯に大きな紙を広げる。彼は真つ白な紙をじつと見る。

真つ白な紙の上で、小さな黒い塊が動き出す。波動を繰り返しながら、

次第に大きく成長していく。ある程度の大きさになると、分裂をはじめ。繰り返しているうちに、小さな粒が紙面一杯に広がり、完全に埋め尽くしてしまふ。真っ白だった紙が真っ黒に変わった。

彼はしばらく真っ黒になった大きな紙を見ていたが、やがて両手を伸ばし、両端を持って紙を持ち上げ、机の上に立てて紙の下端を机に軽く打ち付ける。

紙面の黒い粒がばらばらと机の上に落ちた。

「やはりそうか」

アムンは呟く。

アムンはこうやって「黒の集団」の動きを探っていたのだ。

机のうえには払い落とされた黒い粒が散らかっている。アムンは刷毛で集めて小さなちり取りで掬うと、ごみ箱へさつと捨てた。

「黒の集団」は決戦に備えて、増員に余念がないのか。アムンはこう読んで、対応を考えるが、彼らの行動にはよく分からないところがあった。

アムンはミサを思い浮かべる。彼女がどんな報告を持ってくるだろうか。その報告内容のよって考えを変えなければならぬかもしれない。それなら、彼女の帰りをしばらく待つとしようか。アムンは目を閉じる。

瞼の裏にミサが現れた。必死になにかを訴えているように見える。どうしたのだ。「黒の集団」に捕まったのだろうか。

アムンはハクリを呼ぶ。ミサを知っているのはハクリしかないのだ。

「ミサが助けを呼んでいるのかもしれない。様子を見てきてくれないか」

ハクリを送りだすと、アムンは「黒の集団」が日本で行おうとしている実験プロジェクトに思いを馳せる。

アムンはダイオキシソリン汚染に対する「黒の集団」の動きのほかに現れた

別種の動きから、単なる毒性のチェックではないと踏んでいた。そしていろいろ思案を重ねた結果、一つの結論に達したのだった。

それは地球制覇を目指すための拠点造りだった。

それにしても、なぜ、いま「黒の集団」が増員をはじめなのか。暴力で日本政府の転覆を図ろうというのか。まさかそんなことはあるまい。「黒の集団」とはいえ、もつとスマートな方法を探るだろう。

アムンは考え飽くね、目を上げ、しばらく天空の一点をじつと見つめていた。

24

未佐は湖畔の一軒家へ直行する。彼女は天空から一軒家に近付いていく。

黒い人影が奔めいている。一瞬、彼女は動きを止め、目を凝らす。数多くの黒い服を着た「黒の集団」の連中が一軒家を取り囲むように潜んでいるではないか。

未佐は一軒家の上空に留まり、様子を窺う。

太陽が西に傾き、夕暮れが迫っている。秋の日暮れは早い。もうすぐ夕闇が辺りを包み込むだろう。

彼女には「黒」の連中が透明体識別装置を持ち、夜間でも赤外線カメラで監視をつづけていることは分かっていた。だから、彼女が一軒家に近付けば、たとえ透明体になっても、彼らは彼女に気付くにちがいない。

それでも彼女は幾分でも彼らの目を紛らせるために闇が訪れるのを待つことにした。そして暗闇のなかを猛スピードで一軒家へ向って急降下しよう

とここに決めた。

いつもの彼女なら、一端引き返すところだった。だが、彼女はリスクを冒しても木実子に会って話したかったのだ。

いつまで待っても帰ってこない耀のことが心配だった。タイムスリップを繰り返しているらしい耀は、すでに、いろいろなことを知ってしまった。いるにちがいない。彼女の身体のことや耀自身の身体のことではなかった。それよりも別のことが彼女を悩ませていたのだ。

耀はそれをいまい知ろうとしているにちがいない。いや、もう知ってしまったかもしれない。とにかく、一刻も早く木実子に会って、薄々感じていた耀の出生の秘密を聞き出さなければ気が済まなかった。耀が自分の出生の秘密に悩むのをそばにいてなにも知らずにいるわけにはいかないのだ。

太陽が山陰に没していく。名残惜しそうに西の空を染めていたあかね色の残照もすぐ消えていった。

未佐は一軒家がけて急降下した。一瞬、「黒」の陣営に動きがあった。彼女は構わず急降下をつづけ、一軒家へもぐり込んだ。

吹き抜けのある広いリビングだった。湖に面して大きなガラス戸があつて、湖が一望できる。南西の角がキッチンエリアで、そこに置かれたテーブルに男と女が向かい合っている。ふたりはロウソクの火のもとで食事中だった。

未佐はじつとふたりを見る。仄暗いロウソクの火に照らされた男と女は、木実子と森野だった。

彼女はリビングの片隅で食事が終わるのを待った。食事を終えた森野が食器類をシンクへ運んでいく。木実子が食器を洗いはじめる。

未佐は木実子が一人になるのを待った。木実子と話すには、どうするか。

森野が食器類を運び了え、テーブルのクロスを取り換えると、リビングの中央にあるソファへ移る。リビングはテーブルのロウソクだけだ。仄暗い光のなかで、森野はじつと暗い闇が広がる湖面を眺めている。

未佐は木実子の背後に近寄り、木実子の身体の中へ滑り込む。一体同化だ。

「耀ちゃんに会った？」

「ヨウ……、耀なの」

「そお、あなたの耀ちゃんよ」

木実子は食器洗いの手を休め、不思議そうな面持ちで辺りを見回す。

「耀はどこ？」

「耀ちゃんはいま旅の最中よ」

「旅？ なんの旅……」

「自分探しの旅かしら」

「あの子は事故死したのよ。旅だなんて……。それとも死出の旅……」

「自分探しの真つ最中なの」

「あの子はわたしの子よ。自分探しだなんて……。でも、あの子はもういない」

木実子は洗い残りの食器を洗いはじめる。

「耀ちゃんの父親は誰なの」

「……」

木実子の手の動きが止まる。

「耀ちゃんの父親は誰なの。土田先生？」

未佐は土田の面長で色白の顔を思い浮かべる。

「違うわ。あんなやつ……」

「じゃ、誰なの」

「しつこいね。誰でもいいじゃないの。関係ないことでしょ」

「耀はいま父親探しをしているのよ」

「分かりっこないわ」

「どうして……」

「どうしても……」

「耀ちゃんはタイムスリップして、あなたの過去を辿っているのよ。必ず、突き止めるわ、父親が誰かを……」

「分からないわ。分かる訳ないわ」

「どうしてなの。なにか……。まさか……」

「そうじゃないわよ。誰のものか、秘密厳守のことなの」

「人工授精なの……」

「そお、A I D……」

「なぜなの。耀ちゃんはA I D児なの。なぜなの……」

木実子は手を休め、キッチンの小窓から前面に広がる湖に視線を移す。

湖面には月光が映え、時折湖水が光る。

長い時間、木実子は動かなかった。未佐は黙って待った。

何分、いや、何十分か、ようやく、口を開く。

「どうしてそんな気になったのかしら。いまでもはつきりしたことは分からないけど、あのときは土田の子を墮胎したばかりのときだわ。どうしても我慢できなくなつて、土田と別れることになつて……。墮胎したあとになつて、急に子どもが欲しくなつて……。いま思うと、墮胎したことに対する罪悪感もあつたのかしら……」

「ひとつの生命を奪った罪滅ぼしに、代わりにひとつの生命を宿そうと、無意識のうちに思ったのかもしれない。でもそんな勝手なことを誰も許してはくれなかつたわ。だから、耀は事故死したんだわ……」

「そうでないわ」

未佐は叫んだが、声にならなかつた。

「出張でアメリカへ行ったとき、友達からA I Dキットを受け取つたの。

いや、強引に頂戴したというわけ。日本では面倒だけど、あちらではA I Dのボランティアサイトもあつて、希望条件を言つて申し込めば、キットを郵送してくれるというし、とにかく簡単に手に入るのよね。それに、日本国内でのA I Dでは近親婚の危険も高くなるので……」

未佐は聞かなくてもいいことを聞いてしまったような気がした。木実子にいまのお喋りを忘れるようにセットすると、彼女は木実子から抜け出る。そして森野のいるソファへ移動する。

森野はソファで身体を伸ばし、横になっている。眠っているのか。彼女はソファのそばに佇み、湖に目を向ける。

湖面が月光を受け、光っている。風があるのか、時折、光が揺らぐ。

ふと、彼女は光のなかに異質な光が混じっているのを感じた。対岸から発している光だつた。彼女は急いで身を伏せる。

「ミサ、大丈夫か」

彼女は声のするほうを見た。ハクリだつた。

「……………」

## 第二章

25

耀は木実子の後を追う。

何度もタイムスリップを繰り返して、ようやく、木実子が母の貴世とAIのDのことを話題にしている場面にたどり着いたのだ。念のために、その時点から約半年ほど以前にスリップして、彼は毎日木実子の後を追いかけているのだ。

木実子は母の元から離れて独立し、通勤に便利な勤務先に近いアパートの一室に移り住んでいた。彼はアパートの小さな部屋の片隅に居座り、木実子の行動を見守りつつける。

彼はどうしても自分が一個の生命体となる瞬間を捉えたかった。いまさら父親が誰であるかを知ったところでどうにもならないことは分かっていた。だが知りたかった。誰が父親あるか知りたかった。

「ぼくにもパパがいるんだ。ぼくのパパは……」  
大声で言ってみたかった。

彼は毎日、木実子の後に付いて、勤務先の研究所へ通う。ときには先回りして研究所で待つこともあったが、一度通勤途中で寄り道した木実子に置いてきぼりを食って以来、大概は後を追うことにしている。混雑する通勤電車は嫌いだ、荷物棚に乗ることを覚えてから、結構楽しい時間だ。研究所で待つのは、退屈だった。大抵は昼寝しているが、起きているときはなにもすることがない。窓がら、外の景色を眺めているか、人びとの側

で会話を盗み聞きして退屈さを紛らわしている。

大体、同僚の噂やファクション、あるいは上司の悪口など、女子の研究補助員や事務職員のたわいない立ち話が多いが、この前は激しい口論に巻き込まれそうになった。それ以来、あんまり側によることはしなくなったが、側でないと噂話がよく聞き取れない。なにしろ、廊下の片隅や流し台のわき、あるいは洗面所などで、こそこそと低い声で話すことが多いのだ。噂話になるとさらに低く、ひそひそ話だ。

時折、木実子が話題になることもあった。恋人は誰とか、深い関係とか、誰それと不倫しているらしいとか、聞こえてくることは芳しくなかった。三五歳も過ぎると、いくら美人でも鼻につくらしい。あまり聞きたくない話が多いが、それでもつい聞き耳を立ててしまう。

「あのひと、最近おかしいわよ。ときどき洗面所で吐いているのよ」

「ホント。あやしいわね」

「あやしいって……」

「知らないの。つわりじゃないの。つわりのとき、吐くそうよ」

「えエエ……、妊娠しているということ。誰かしら、相手は」

「ほら、あのキザな大学教授とよく食事をしているらしいわよ」

「あなた、よく知っているわね」

耀は木実子が妊娠していることは知らなかった。木実子が外出するときには付いていかなないときのほうが多かった。一度学会の研究発表に付いていて退屈したことがあって以来、木実子が他所へ出かけるときには先にアパートに帰って待った。

彼は木実子の噂話を信じるができなかった。だがそれを耳にしてから、彼は一層注意深く木実子を観察するようになった。

「つわり、終わったのかしら。最近吐いているところみかけないわね」

「ホントにできていたの。全然分らないじゃない」

「もう墮したのかしら。顔が青いし……」

「まあ……」

耀も最近木実子の顔色が悪いのが気になっていた。暗い目をして、帰ってくる、食事もせずに、すぐ横になる。

彼は気になって、一晩中一睡もせずに木実子の様子を見ていた。明け方近くになって、つい寝込んでしまった。

目を覚ましたときには、木実子の姿がなかった。

眠っているうちに、研究所へ出かけてしまったのだろうと思い、彼は一日中部屋の片隅に蹲って、木実子の帰りを待っていた。だがその日、木実子は帰ってこなかった。

26

「お帰り、ハクリ」

アムンだ。

彼はハクリの帰りを待ち侘びていた。一刻も早く「黒の集団」の最新状況を知りたかった。すでに「黒の集団」が増員をはじめているらしいが、本当にそうなのか知りたかったのだ。

「やはり、『黒の集団』構成員の数が増えている感じがします。全体どの程度か分かりませんが……」

ハクリによると、湖畔の周りにはかなりの数の「黒の集団」が配置され

ていたらしい。なんのための大量配置か、いまいちはずりしなかったが、まえのときの倍以上の数の配置が見られたという。

「すると、やはり彼らが考えていることは……」

構成員を増やしているとすれば、その訳はなにか。なんのためのものか。

「邪魔者は殺せ」主義の暴力的「黒の集団」とはいえ、表立って日本政府に衝突こうとするとはいくらなんでも考えにくい。彼らが気兼ねなしに暴力を揮える相手といえ、彼らの行動を邪魔する「天の組織」だ。

「そうか。ヨウが危ない」

ハクリが飛び上がった。

「そうだ。彼らはまず、われわれ『天の組織』の一掃を目指しているにちがいない。彼らにとつて、われわれは目標達成のための最大の障害だからだ」

「一人残さず捕らえ、抹殺しようとしているのでしょうか」

「多分、そんなところだろう。できるだけ早く、ヨウを見付けださなければ、取り返しがつかなくなる。ミサにもよく伝えておくように」

アムンはハクリを見送ると、椅子から立ち上がり、机のうえに大きな白い紙を広げた。前と同じ紙だ。自分の考えの妥当性をチェックしようというのだ。

彼らは一軒家のふたりをおとりに、ヨウとミサを捕まえようとしているにちがいない。

かつて、ヨウとミサがロープを捲かれて「ミノムシ」状となった木実子と森野を助け出したことがあった。「ミノムシ」状のふたりが爆発で空中に放り出されたとき、ヨウとミサがふたりを空中で捉え、そのまま空中遊泳で湖畔へ運び出したの

そのとき、彼らはヨウとミサの後を追ひ、写真を撮つてふたりの人相書きを手に入れているはずだ。

アムンは彼らが常時一軒家の監視をつづけているというハクリの情報に基づいて、湖畔の一軒家の位置関係と「黒の集団」の配置場所を重ね、作戦シミュレーションをはじめた。この結果をミサとヨウに伝え、つねに警戒態勢を取るよう指示するつもりだった。だがヨウの行方は遅々として分からないのだ。

不用意に、ヨウが一軒家に近づくようなことがあれば、こんどこそ捕まってしまうだろう。そのときはどうするか。

アムンは万が一、ヨウが「黒の集団」に捕らえられたときの救出作戦のシミュレーションも行なつてみる。だが救出作戦はなかなか思うように進まず、期待するような結果は出なかった。となれば、一刻も早く、ヨウを探し出すほかなかった。

アムンは椅子に深く腰をかけ、じつと天空を見上げる。目は天球の奥を覗いているようだった。

27

つぎの日、午後遅く、木実子がアパートに帰ってきた。

耀は置いてきぼりにされたことに腹を立て、大声で「どこへいったの」と詰る。だが彼女には聞こえない。

肝心のときに置いてきぼりにされてはこれまでの苦労がふいになる。彼は自分の身体を木実子に結わえ付ける工面をして、いつでもどこへも付い

ていける態勢を整える。

木実子はその日、どこへも出かけなかった。夕方、早めにベッドにもぐると、そのまま眠り込んでしまった。

あくる朝、いつもより早く起きると、木実子は引いて歩ける長いリフトがついているキャスター付の小型スーツケースを取りだし、旅支度をはじめた。いつもの時間に、スーツケースからキャリアーフトを引き出し、これを引いて出勤する。

彼は彼女の後に付いて研究所へいく。

「室長、まっすぐお出かけじゃなかつたんですか」

部下の男性研究員だ。

「持つていく書類を取りに寄つたの。計算結果を見たら出かけるわ。あとよろしくね。来週から出るわ」

「夕方の便ですよね」

夕方、成田を発つと、日付変更線の関係で、サンフランシスコに同じ日の早朝に着く。そこで国内線に乗り換え、デンバーへ飛び、そこから会議のあるボルダーへ向う予定だった。

彼女は午前中はいつものように仕事していたが、午後早めに研究所を出る。

彼は彼女の後について成田国際空港へ行つたが、どうなることやら心もとなかった。なにしろ、飛行機に乗るのははじめてのことだ。彼は彼女から離れまいとぴつたりと付いている。

成田を離陸すると、一端南下し、東へ向う。やがて顔を出す太陽に向けて、地球の自転する方向へ進むのだ。

夕食のサービスが終わると、海外出張が多く旅慣れた木実子は、早い朝



に備え、窓のシェードを下げ、耳栓を押し込むと、アイマスクにつけて眠りに入る。彼も狭い座席の間に滑り込み、ゆっくりくつろぐ。

28

未佐はインターホンの前でスイッチを押そうか、一瞬躊躇する。ハクリから耀が危険な状態にあるらしいと聞いて飛んできたが、いま話しておくべきか、もう少ししばらく後にしたほうがいいのか、迷う。

「ミサ、なにか用かね」

金属性の声が響く。アムンの声だ。気配で感じたのか、それともインターホンのモニターカメラか。

「はい。お話しておきたいことがあるのですが……」

「じゃ、入ってきなさい」

間仕切りの壁が動き、隙間ができた。

壁のなかには空間が広がっている。目を凝らすと、奥の方に執務机に座っているアムンの姿が小さく見える。

未佐は真直ぐ近付いていく。一步進むと、アムンの姿が大きくなった。数歩進めば、執務机の前に出る。

「実は、耀が……」

「ヨウがどうしたのだね」

「耀がいまアメリカへ行っているようです。実は……」

「ほお……」

アムンは目を丸くした。

「耀は湖畔の一軒家に住んでいる秋野木実子が産んだAID児なのです。ドナーはアメリカに住んでいる人らしいのですが、耀はいまそのドナーが誰であるか、探しているのです。自分の父親を探しているのです」

アムンはじつと未佐を見ている。彼女はアムンの底なしのように澄んだ目に見詰められているうちに、なぜか、かちかちに固まっていた身体が次第に解きほだかれていくように感じた。

「きみたちと湖畔のふたりの関係を『黒の集団』の連中が知っているのかね。知っているとなれば、彼らの当面のターゲットはきみたち二人だ。ヨウが現在に戻った瞬間が一番危険だ。ミサはいますぐタイムスリップして、ヨウを追いかけるのだ。ヨウを助けるのだ。だがヨウはいまなんとか自立しようとしていることを忘れないように。自立への道を歩むものに過剰な手助けはいらない。邪魔せず、できる限り何事もヨウ自ら解決するように手助けすることだ。そしてヨウになが起きて『天の基地』に連れ戻すのだ。ハクリにも同行してもらおうか」

アムンはハクリを呼ぶ。

「分かりました」

一部始終を聞き了えたハクリは、ミサを促し、飛び立つ。

アムンは椅子から立ち上がると、ふたりの姿が消えるまで見送った。

29

機内が一瞬、騒めいた。窓のシェードの隙間から、光が射し込んでいる。日の出だ。太陽が東の空に現れたのだ。

耀は顔を上げて木実子を見上げる。彼女の席は空だった。彼は慌てて機内を駆けずり回る。どこにもいない。

彼は落ち着きを失い、おろおろと通路を歩き回る。ここを落ち着かせ、辺りを見回す。乗客の多くはまだ座席で眠っている。

そうだ。ここは飛んでいる飛行機の機内だ。いま彼女はここから出ることはできない。とすると、機内のどこかにいるはずだ。

彼はここを落ち着かせ、彼女の座席に戻る。彼女は必ずここに戻ってくるはずだ。彼はじっと待った。

しばらくして、彼女は戻ってきた。微かに香水の匂いがする。洗面室にいたのか。彼は慌てた自分を思いだし、ひとり苦笑する。

乗客に動きが現れた。毛布を畳み、シールドを開ける者。立ち上がり、通路を歩く者。やがてトイレの前に列ができた。

到着予定時間、現地の天気や気温のアナンスがあった。乗務員が動き出した。そろそろ朝食の時間だった。

トレーにセットされた朝食が配られ、飲み物のサービスがつづく。木実子は早々に食事を済ませ、スケジュール表を取りだし、チェックしている。

食事の済んだところからトレーが下げられて片づけられていく。到着時間や天候状況のアナンスがあつて、飛行機は高度を下げていった。

ベルト着用のサインが出た。

機内が慌ただしくなった。彼は自分まで落ち着きを失っていくような気がした。彼は木実子を見る。そして彼女の足にしがみつく。

飛行機は高度をさらに下げ、着陸態勢に入る。空港が間近に迫る。軽い衝撃音を響かせ、機体が滑走路に着地した。飛行機は機体を振動させなが

らそのまま滑走路を進むが、逆噴射で急速に減速していく。

飛行機はエンジンを回転させ、自力で国際線の到着ターミナルビルに近づいていく。やがて、飛行機は完全に動かなくなった。

乗降客ブリッジが接続され、出口のドアが開けられた。機内が急に騒々しくなる。乗客は座席から立ち上がり、降り支度をはじめめる。早いものは出口へ移動し出す。

木実子はスーツケースのリフトを引き、通路に出る。前の乗客が歩き出した。彼女はその後につづく。乗降口を出ると、彼女は人込みを縫ってどんだん前へ進む。

入国手続きを済ませると、彼女は国内線のターミナルビルを目指して長い廊下を大腿で歩き出す。早朝なのに、ビジネスマンの姿が目につく。

耀は木実子に必死にかじりつく。

30

「ヨウの邪魔をしないようにしなければ……。それでヨウはいまどの辺にタイムスリップしているのかな」

ハクリは未佐を振り返る。

「耀が生まれる前のことだから、七年から六年前ころかしら」

未佐にははつきりした日時が分からない。耀は父親探しの最中だ。とすると、木実子がAIDを試みるあたりにタイムスリップしている可能性が高い。

「ヨウと同じレベルにタイムスリップしては彼に気づかれ、彼の行動を邪

魔することになりかねない。彼にはわれわれが近くにいることを知らせないほうがいいだろう」

ハクリはタイムスリップの設定時間を調整します。

とにかく、ヨウのいるタイムスレベルでないとところへタイムスリップしてそこからヨウの動きを見守るのだ。だがタイムスレベルが離れすぎていてもまずい。

一分ほどのレベルの違いなら申し分ないが、それは至難のことだった。可能なかぎり近くにタイムスリップできればいいが、近付けば近付くほど難しいのだ。

「離れていては、いざという時に手助けできないかも」

多少離れていても、そう離れていないレベルにタイムスリップできればいいが、タイムスレベルが違えば、手助けする必要があるときに手助けできないのではないか。未佐は心配だった。

「ミサは手助けするために同じレベルにタイムスリップしたほうがいいと思っているのかね。でもヨウに見つかれば、ヨウのこれまでの努力がフィになるかもしれないよ」

「耀に見つかからないようにして、彼を追いかけることもできるんじゃないの」

未佐とハクリはタイムスリップする。だが何度繰り返しても、耀をみつめることができない。

「もう少し正確な情報が欲しい。これでは間に合わないかもしれない」

「もう一度、湖畔の一軒家へ行って、詳しいことを聞きだそうかしら。アメリカでAIDキッドを手に入れたことは分かっているけど、何時か不明だわ。その日時が分かれば、タイムスリップがうまくいくのね」

「多分、うまくいくだろう。だがいま一軒家に近付くことは危険だ」

「でも、耀がアメリカへ行っているかもしれないし、木実子さんがAIDを実施しようとしているかもしれないのよ。そうなれば手遅れよ。一刻の猶予もないわ」

「仕方がない。一軒家へ行こう。わたしは上空で見張っている。ミサがひとりで一軒家へ下りて彼女から聞きだしてくれ」

ふたりは一軒家へ接近していく。

幸いなことに、夕闇が迫っていた。未佐はしばらく上空に滞留し、暗闇を待って一軒家へ急降下して行く。

木実子と森野はリビングのソファでくつろぎ、薄暮の湖水を眺めていた。

未佐は木実子と一体同化を試みる。一瞬、木実子が身体をくねらせた。

「いつなの……」

「なんのことなの」

「AID……」

「……………」

木実子は口を噤んだままだ。長い間、口を開こうとしない。

「ねえ、いつなの。一九九二年……」

「もう忘れたわ」

「一九九二年三月……」

「まだ、道路に残雪があったわ」

「三月の……」

「二十三日だったかしら」

「どこ……」

「ボールダーのBホテル。確か、四四三号室だったわ」

未佐はリセットして、ハクリを呼び、木実子との会話を伝える。

「早く、戻るんだ。『黒の集団』が一軒家を包囲している」

ハクリの切羽詰まった声がした。

未佐はふと、木実子の記憶をリセットしていないことに気づいた。本人の記憶にないはずの未佐との会話の記憶が残っていると記憶に混乱が生じるのだ。彼女は急いで木実子に入り込み、リセットを施す。

「なにするのよ……」

突然、木実子が暴れだした。後ろから迫ってきた黒装束の男が彼女を羽交い締めしたのだ。

彼女の抵抗は一瞬で終わった。もう一人の男が森野を襲撃する。ふたりは気を失って、床の上に伸びてしまった。両手足を縛り、猿轡をはめる。

玄関から数人の男たちが入ってきた。

「女がもう一人居るはずだ。『天の組織』の一味だ。探せ」

隊長か。男たちは部屋に散って、隅々を探し回る。

「どこにもいません。本当にもう一人隠れているんですか」

「そうだ。あれを持ってこい」

透明体識別装置を持った男を先頭に、ふたたび家中をくまなく探す。

未佐は木実子の身体のなかから、「黒の集団」の動きをじつと見守る。

「黒の集団」は彼女が一軒家へ入るところを見ていたのだ。

「ハクリ、連中がわたしを捕らえようしているらしいの。家に押し入って、いま家捜しをしている。ふたりは捕まって、縛られてしまったけど、わたしは木実子の身体のなかにいるので、見つからずにいるわ。いま出ることでできないので、先に行ってください。早くしないと遅れてしまうわ。『黒の集団』が出ていったら、すぐあとを追いかけますから」

未佐は上空にいるハクリに連絡する。

「分かった。じゃ、先に行くけど、追いかけて来てくれ」

ハクリの微かな声が届く。彼女は大きく頷きながら、木実子のなかで連中が諦めて出ていくのを待った。

31

木実子が税関を通り、自動ドアからロビーにでると、出迎えの一団のなかで、大きなサングラスをかけた女が手を上げ、合図した。花井咲子だ。

木実子の大学時代の友達で、留学以来、こちらの大学に居座ってしまい、名をエリザベス（リズ）と変えている。木実子とよく似て、目は大きい。焦点がぼけた柔らかい感じの顔立ちだが、とにかくお喋りだ。賑やかな人柄のせいかな、人気があつて、とりわけ人脈は豊富だった。

「やあ、元氣そうね、サキ」

「キミコも……」

デンバー空港から会議のあるボルダーまで車で小一時間かかる。咲子は木実子が出張できたときには、車で必ず空港まで迎えに来てくれる。

空港そばの道端には泥まみれの残雪があつた。車はすぐ高速道路に入る。

「これなーに……」

助手席のまえのグローブボックスの窪みに小さな段ボール箱の小包が載っている。

「あ、これ。いつか話したAIDキットよ。出かけるときに届いたので、そのまま持ってきただけなのよ。待っている間に、なかを覗いてみたけど」

「ふーむ……」

「興味ない？」

「それでもないけど……」

木実子は母貴世とのやり取りを思い出す。もう直ぐ四〇歳になる。四〇までに子どもを産むなら、この一、二年のうちだ。必ず妊娠するとは限らないし、妊娠しても直ぐ生まれるわけでもないのだ。それに育児を考えれば、残されている時間はなかった。

「そお……」

咲子はちらつと木実子に目を走らせた。

「ドナーは……」

「このドナー（ボランティアの精子提供者）の最低条件は健康で、IQ一三〇以上なの。このサンプルはアジア系アメリカンのものね」

「アジア系……」

「チャイニーズアメリカンといってもいいようだけど、ほんの少し日本人とコレアンも混じっているらしいの」

「同じサンプルは無数にある……」

「そんなことないわよ。近親婚の問題もあるし、AIDで人類の遺伝子が劣化するようでは困るから、かなり選別して限定しているはずよ。たとえば、ボランティアでも何度も採取するわけにはいかないんじゃないの」

「でも、どうやってチェックするのかしら。ボランティアは一箇所だけに提供するとは限らないでしょ。これを商売としているひともあるでしょうし、それにある意図で自分の精子をばらまいて歩くこうとするひともあるんじゃないの」

「まあね。採取回数を制限しても、提供するサイトや企業、団体や個人は

数限りないからね。相互にドナーチェックをしているとも思えないし……。まあ、良心的なところを探すほかないかもね」

「それで……」

「これはボランティアサイトのものよ。比較的良心的という評判のね。このサイトのドナーは定評があるの。Hとか、Mなどの一流大学の学生で、スポーツをやる活発な若者、それにIQも一五〇以上というし……」

「天才クラス。それで健康には問題ないのね」

「もちろんよ。アメリカンフットボールの選手もいるそうよ」

「まさに超人ね。でも『天才と狂人は紙一重』ともいうけど……」

「まあね……」

五車線の幅の広い道路がつづく。車はスピードを上げて過ぎていく。遠くに白い雪の被ったロッキーの山並みが見える。

インターを出て、細い道に入っていく。街が見えてきた。

「もう着いたわ」

「食事していかない？ ご馳走するわよ」

「残念。午後、授業があるのよ。ゆっくりできないの」

車はホテルの前に止まった。

「じゃ、またね。これ、貰っておくわ」

木実子はドアを開け、地面に下り立つと、小包の小さな段ボール箱を掴みし、小脇に挟む。

「あ、でも、それは……」

「いいでしょ」

「日本には持ち込めないんじゃないの」

「いいわ。またね。ありがと」

木実子は勢いよく車のドアを閉めた。

32

木実子はフロントでチェックインを済ますと、エレベーターを探した。部屋は四四三号室だ。彼女は四階へ向う。

エレベーターを降りると、絨毯を敷いた廊下がつづく。彼女はスーツケースのキャリアリフトを引き、四四三号室を探す。暗い廊下だ。ドアに近付かないと、プレートの数字が判然としない。前方のほうへルームナンバーが進むと思ひ、プレートを確かめずに前へ進むと、逆だつたりすることがある。彼女はドアに目を近づけ、ドアのナンバーを確かめる。

耀は日本からずつと木実子に纏わり付いていた。飛行機のなかはもちろん、咲子の車のなかでも、木実子から一時も離れなかった。だがホテルの入ってから、気が緩みがちだった。ともすれば遅れて置いてきぼりを食らい、薄暗い廊下を音も立てずに勢いよく急ぎ足で歩く木実子を見失うことがあった。彼は急いで追いかける。

木実子はドアの前にいた。キーカードを差し込んで、ノブに手をかけている。

彼は急いで、ドアプレートを見る。

「四四三号だ」

耀はルームナンバーを覚える。

木実子はドアを開け、スーツケースをなかに入れると、部屋の中を一瞥し、ドアにチェーンをかける。その部屋にはバルコニーがあつて、ガラス

張りの観音開きのガラスを嵌め込んだ扉からレースのカーテン越しに外光が射し込んでいた。

小脇に抱えていた小さな段ボール箱の小包とバッグをベッドに放り出すと、彼女はレースのカーテンに近づき、両手で一杯に開き、扉を全開する。冷気を吹くんだ空気が部屋のなかを吹き抜けていく。

彼女はコートを着たままベッドに腰を下ろす。そしてそのまま身体を仰向けに倒していった。

長い間、身動きひとつしなかった。だが眠っているわけではなかった。両眼を大きく見開き、外光にほの白く見える天井をじつと見ている。

耀は絨毯が敷き詰めてある部屋の片隅に陣を取り、じつと木実子を見守る。身体はすっかり疲れていたが、なぜか頭が冴えていた。彼にはこれからは始まるのか想像つかなかったが、なにか重大なことが始まるような予感にわくわくしていた。

だがいつまで待っても、木実子はベッドでじつとして動かない。彼は待ちくたびれて、ベッドに近付き、彼女の顔を覗く。

相変わらず、両眼を大きく開き、天井を睨んでいる。何回覗いても、同じだった。彼は諦めて、壁に身を寄せ、目を閉じる。

突然、彼女は身体を丸める。それから、やおら身体を起こす。ベッドから立ち上がると、ガラスの扉を閉める。

彼女はバッグだけを持って、部屋を出た。エレベーターで一階におり、レストランに入った。

昼食の時間が過ぎたせいかわ、席は空いている。彼女はクラムチャウダーとサラダを注文し、ゆっくり食べる。食べ了えて、コーヒーを注文しようとしたが、すでに客がひとりもいず、退屈そうに立っているウエイトレス

に気づいて、彼女も出てしまう。

レストランを出たところで、彼女はしばらく立ち止まった。それからエントランスホールを横切り、回転ドアを押して外へ出た。

33

耀はふと目を開け、ベッドの上に木実子の姿がないことに気づいた。いつの間にか、居眠りしていたらしい。

彼は慌てて、部屋中を探し回る。洗面所にもバスルームにも彼女はいなかった。彼はベッドの下やクロークのなかまで見回る。

一体、どこへ行ってしまったのか。

スニーカーがあるし、ベッドの上には小包の段ボール小箱がほつたらかしくなっている。とすると、すぐ戻ってくるはずだ。

彼は部屋の片隅でじつと待った。だがいくら待っても木実子は現れない。

彼は次第にいらいらが募り、我慢できなくなっていく。立ち上がって、部屋のなかを歩き出す。カーテンの隙間から、外を覗く。木実子の姿はない。バルコニーのガラスの扉を一杯に開く。

彼はバルコニーで身体を伸ばして木実子を探す。

小一時間経っても、木実子は戻ってこない。

彼はベッドに仰向けになった。木実子がじつと見詰めていた天井を見る。だが彼女がどこへ行ったのか、皆目見当がつかなかった。

彼は苛立ち、ベッドの上で軋転とする。

小包とぶつかり、はね飛ばす。彼はベッドから下り、床に落ちた小包を

掴み、手に持った。

「こんなもの」

一瞬、怒りが込み上げてきた。彼は小包を床に思いきり叩き付けた。

小包みは鈍い音を発て、床を転がった。

そのとき、ドアが開く音がした。彼は小包を拾い、ベッドの上に放り投げた。

34

木実子は咲子からAIDキットを強引に貰い受けたものの、踏ん切りが付かず、迷っていた。今更、返すこともできないかった。

本当はできたら日本に持ち帰って、ゆっくり考えるつもりだった。それでも遅くないと思っていた。だが日本国内に持ち込むことは難しいだろうというし、それにAIDキットのなかの精子が成層圏を飛ぶ機内で浴びる宇宙線の影響も心配だった。

彼女は日本国内への持ち込みを断念した。

AIDを実行するかどうか、早々に決断しなければならなかった。いたずらに時間が経過すれば、AIDキットそのものが使用不能になるおそれもあった。

咲子との会話を何度も思い返ししながら、彼女はホテルの周りを当てもなく歩く。

母貴世に対してAIDで子どもを産めると強がりと言ってみたものの、いざAIDをひとりで行うとなると、なんとなく不気味で、怖かった。

どこの誰とも分からないドナーの精子を体内に注入することに抵抗があつたし、それに人工授精で妊娠することに対しては一直線に踏み切れないものを感じるのだ。ことにドナーが日本人でないことが気になっていった。

AIDさえ忌み嫌っているのに、ドナーが日本人でないことを貴世が知つたら、大騒ぎになるにちがいない。こう思うと、ますます憂鬱になつてしまふ。

だが考えようによつては、日本人より外国人のほうが秘密を守るうえで得策かも知れない。それに近親婚の危険も少なくなる。

彼女は何度も同じことを繰り返して考えながら、自分に対して決断を迫っていく。そしてとうとうひとつの結論にたどりついたのだ。

一回の人工授精で妊娠するとは限らない。メンスが終わつてしばらく経つから排卵がはじまっているかもしれないが、たとえ妊娠しても、もし不都合が生ずれば、どうするかはそのときになってから考えればよいではないか。

ようやく落ち着きを取り戻し、木実子は急ぎ足でホテルに取つて返す。

彼女は四四三号室に戻ると、コートを脱ぎ、洗面台の鏡の前でじつと自分の顔を覗く。幾分やつれた顔をしているが、大きな目が生き生きと光っている。

ベッドの上に放り出していた小包の段ボール小箱を開き、AIDキットを取り出し、ベッドの枕元の横にあるチェストに置く。それから、ゆつくり服を脱いでいく。そしてシャワーを浴びるのだ。

もう躊躇することはなかった。彼女は自分に命じたとおりに、順を追つて行動に移していく。

シャワーを浴びた木実子が身体にバスタオルを巻き付けてベッドに戻つ

てきた。彼女はベッドに腰を下ろし、小包の説明書を読む。徐にAIDキットから注入器を取りだし、セットするとベッドわきのチェストの上に置いた。

「やめてくれ」

耀は大声で叫ぶ。だが彼女には聞こえない。

彼女は素早くバスタオルをはずしてベッドにもぐり込んだ。それから手を伸ばし、セットした注入器を手を取った。

### 35

チェストの上で電話が鳴る。

木実子は手を伸ばして受話器を取ろうとするが、なぜか身体がびくとも動かない。身体に重しが載せられているようだった。目を開けようとするが、瞼が貼り付いているようでどうしても開かない。

ベルが鳴り終わる。

彼女はふたたび深い眠りに落ちていく。

身体から重しが取れた。軽くなった身体はまるで羽のように宙に浮き、風に飛ばされていく。

いつのまにか、彼女は両側に高いビルが立ち並ぶトンネルのようなビルの谷間の細い路地を歩いていた。路地は一直線に延々と伸びている。彼女はひたすら歩く。日が差し込んで明るかった路地も日が陰りはじめ薄暗くなりだした。それでも、彼女は歩きつづける。トンネルのような路地の先にあるかもしれない別世界をめざしているのか、ただ歩く。すたすた歩い



ていく。

やがて、大きな広場に出た。太陽が明るく輝いている。向こうに教会のような大きな建物が聳えている。多くの人びとが建物の入口をめざして近づいていく。

彼女も入口をめざす。一心に足を運ぶ。だがなかなか近付けない。近付こうとすると入口のほうに遠のいていくのだ。人びとはつきつぎに中へ入っていくが、彼女は何度試みても、建物の中に入ることができない。

これが最後だと思い、入口のほうへ懸命に近付いていったとき、遠くで電話のベルが鳴っているのが聞こえた。ベルにかまわず、入口から入る。

ふと、顔を上げて前方を見ると、大きな建物も人びとも消えていた。

電話のベルが一際大きく響いた。

彼女は手を伸ばし、受話器を取る。

「夢だったのかしら……」

「木実子、どうしたの。なにかあったの。何度も電話したのよ」

咲子だった。

「疲れて眠っていたらしいわ。全然気がつかなかった。昏睡状態だったのかしら」

「いま下にいるの。珍しいひとと一緒に」

「え？ ホテルに来ているの。だれなの」

「会ってのお楽しみ」

「一寸待ってて。シャワーを浴びるから」

体中が汗でべとべとだった。

彼女は受話器を置くと、ベッドでしばらくじっとしていたが、徐ら身体を起こすと、裸のままバスルームへ走る。シャワーの迸る音がした。

耀は一部始終見ていたが、すべてが終わったと思った。彼は部屋の片隅で、木実子がシャワーを了え、部屋から出ていくのを待った。

36

木実子は身体にバスタオルを捲き、鏡のままでドライヤーで頭髪を乾かし、顔を整えると、着替える。それからふたたび鏡のまえに立ち、自分を確かめるように隅々までチェックしてから、出ていく。

耀はドアが閉まると、直ぐ立ち上がり、ベッドのそばに寄った。

チェストの上に、説明書が広がっていた。小瓶や注入器などAIDキットの品々が乱雑に置いてある。

彼は注入器を手に持ち、説明書を手に取った。木実子がベッドのなかでもぞもぞ動いていた情景が浮かんだ。

誰のものか分からない精液を体内に注ぎ込んでいたのか。

「こんなもの……」

彼は床に落ちている小包の小さな段ボール箱を拾い、AIDキットの品々を放り込む。一緒に品々を包んでいた薄い発泡スチロールの充填材も詰め込む。それから小箱を包んでいた包み紙で包み、簡単に紐で括る。

小箱を持ち上げ、掌に乗せる。

「このなかにいるのがぼくの父親なのか」

一体、「父親」とは何なんだ。精子か。精子が「父親」か。精子と卵子が結合して新しい生命が生まれるとしても、単なる精子提供者に過ぎない者が新しい生命の「父親」となっているのか。

木実子の卵子が、誰に提供するか不明または未定のまま採取されて保存されていた精子と出会って（人工的に無理やり出会わされて（授精））結合し、ぼくという新たな生命となったというだけなのか。それは、採取者から切り離された、まさに、いわば人格のない精子から生まれた生命ではないか。たとえ、それぞれの遺伝子を持った男（オス）の「配偶子」と女（メス）の「配偶子」とが合体して子どもがつけられるとしても、だから

といって、AIDにおいてドナー（精子提供者）がその子の父親ということにはなるまい。それは単なる生物学上のオスに過ぎないのだから。彼はいくら考えても、段ボールの小箱のなかに父親がいるとは思えなかった。かといって、無視することもできないのだ。

突然、妙な考えが芽生えてきた。

小瓶のなかの精子を提供したものは誰なのか。どんなひとで、どこに住んでいるのか。秘密とは言え、探せば探せないこともあるまい。

だがなんとなく薄汚い感じがしてならなかった。そんなことまでして精子提供者を知りたいとは思わなかった。精子を提供した瞬間に、精子はすでに人格を喪失してしまい、ただの物質と化しているのだ。

というより、こんなことをして、自分が生まれてきたのだろうか。このほうが心配だった。自分が木実子から生まれたのは本当だろうか。いまになつては、自分が木実子の子であると頭から信じることはできなかった。半信半疑だった。

彼は母体のなかにいる自分が生まれ出る瞬間を見て、木実子から自分が生まれたことを自分の目で確かめたいと思った。

小箱を掌に乗せ、バルコニーに出た。

「こんなものはもう用がない。どこへでも飛んでいけ」

彼は小箱を大空めがけて力一杯蹴り上げる。空高く舞い上がった小箱は、まるで羽が生えたように宙をすいすい飛んでいく。小さくなって、やがて見えなくなった。

37

「なんだ、あれは……」

ハクリは空を見上げる。小箱が飛んでいる。

一瞬、小箱を追いかけようかと思った。だが直ぐ思い直す。一刻も早く、ヨウを探しださなくてはならない。できたら、ヨウがAID児であることに気づくまえに連れ帰りたいのだ。

ハクリはヨウ探しを継続する。だがなぜか小箱が気になって仕方がない。彼は小箱を追い、手に取った。そして小箱が飛んできたほうに視線を移す。

「あ、あれは……、ヨウじゃないのか」

灰色の影が動く。ヨウのように見える。

ハクリは小箱を小脇に抱え、灰色の影に近づいていく。

「ヨウだ」

ヨウと呼びかけようとした瞬間、灰色の影は消えた。

「どうしたのだ、ヨウは……」

ハクリは急いでヨウがいたところに近寄っていく。

Bホテルの四四三号室のバルコニーだった。ハクリは開放されたままになつている扉の隙間から室内へ入っていく。

部屋中を探しても、どこにもヨウの姿はなかった。

ヨウは木実子と一緒に出かけたんだろうか。もし一緒に出かけたとしたら、まだ遠くへは行ってしまい。ハクリはバルコニーに出て、辺りを見回した。だがヨウらしい姿はない。一階のロビーに行ってみたが、やはり、ヨウはいなかった。

ハクリは部屋に戻ってしばらく待つことにした。夕闇が迫ってきた。部屋のな中は薄暗く、明かりが欲しかった。

ハクリはまだ仄かに明るいうバルコニーに出て、小箱を開く。

「A I Dのキッドか。すると……」

ハクリはヨウがA I D児であることを知り、ふたたびタイムスリップしたにちがいないと思った。

小箱を包み直すと、ハクリは翔だした。

38

「ミサが湖畔の一軒家で監禁状態になってしまい、わたしがひとりでヨウを探しに行きましたが、連れ帰ることができませんでした」

ハクリは一部始終を話し了えると、A I Dキットの小箱を差し出し、アムンの執務机の上に置いて、頭を下げた。

アムンは机の向こうからじつとハクリを見ている。

「つきましては、まず、ミサを救出し、それからミサとともに、ふたたびヨウを探しだすことにしたいと思います」

「それで……」

アムンがようやく口を開く。

「ミサの救出には一軒家に住んでいるふたりを替え玉とすり替え、ふたりを他所に移します。替え玉には当組織の要員があたり、自分そのまま居座り、逆に、『黒の集団』の動きを探索してもらおうことを考えております。

ヨウについては、自分がA I D児であることを知ったことを踏まえ、彼の行動を予測し、行き先を突き止めたいと思います。でも、彼自身そろそろ自分で『天の基地』へ戻ることを考えるのではないかと思うのですが……」

「ほう。それで当面、ミサ救出を最優先にするということだな。ミサは連中に気づかれずにいるというが、それはどうかな。気づいていてもそうでないとも言えないのでは。一軒家のふたりが監禁状態にあるということ

は、連中がふたりに対してなんらかの嫌疑を抱いているからにちがいない。連中はすでにミサがいることを感じているのではないか。ヨウやミサの単なるおとりとしてふたりを監禁しているわけではあるまい。すでに、連中はふたりとヨウやミサとの関係を知っているのではないか」

「ヨウやミサとの関係といいますと……」

「ミサは話さなかったのか。ふたりのうち、女のひとはヨウの母親だ。問題はこのことを連中が知っているのかどうか」

「そうでしたか。その辺のところは分かりかねます。やつらの行動の動機がどうもはつきりしない……」

「うむ……」

アムンは作戦シミュレーションを思い浮かべる。

もしかしたら、ミサの救出を機に「黒の集団」と闘いがはじまるかもしれない。そのときは湖畔の一軒家が「黒の集団」との闘いの場となるだろう。そのときはどんな闘いとなるか。多分「黒の集団」は数にまかせて一気に攻めてくるにちがいない。正面で受けて立ちたいが、当方にはそんな

力はない。

もともと「天の組織」は戦う集団ではなかった。だが闘いを挑まれば受けて立つほかないのだ。だがまともにぶつかれば、ひとたまりもないだろう。

かといって、ひとたび、闘いとなったら、負けてはならない。緒戦に負ければ、ずるずる押され、日本は「黒の集団」の思うがままになってしまう。

ではどうするか。闘わずに勝つ法はないか。

「連中はミサを捕らえるために一軒家に攻め込んだのか、それとも、ミサには気づかず、ふたりだけを目当てに踏み込んだのか」

「それは……」

「ミサと連絡して調べるのだ。ミサを捕らえるために一軒家に踏み込んできたのなら、ミサを救出すれば済むが、もしそうでなければ、ふたりを巻き込み、厄介なことになる。とにかく、ミサと連絡するのだ。いいかね。

一軒家では決して連中と戦いを交えないこと」

「はい……」

ハクリは去ろうとして、アムンの執務机の上に置いた小箱に目を留める。

「箱のなかのサンプルとヨウとの間に親子関係があるのかどうか、DNA親子鑑別法でチェックすれば分かるかもしれない。もし親子関係が認められたなら、サンプル提供者を探し出してやってもいいが……。まあ、ヨウの意思を確かめてからだね」

アムンはハクリの心中を読んでいたのだ。かといって、アムンはハクリが思っているように、親子関係のチェックをしてみたいとは思ってなかった。自分がAID児であるということを知って、ヨウはひとつの試練を潜

り抜けたのだ。サンプル提供者を知ったところで、AID児であることにかわりはない。そうであれば、なにも先走ってサンプル提供者を探しだすこともないし、さらに言えば、ヨウの親子関係のチェックも必要ないのだ。アムンはハクリの後ろ姿を見送りながら、最前線に立つて「黒の集団」と闘うヨウとミサの姿を夢想していた。

39

「耀ちゃんがAID児であることを知ったらしいわ」

「え？ ホント……」

「耀ちゃんは父親を探してまわっていたの。そしてとうとう……」

未佐は木実子に焼却炉爆破事件以来のことを一部始終話す。若干の推測も加えていたが、すべてをさらけ出した。もちろん、自分が半陰陽であることも知つたにちがいないことも付け加える。

「そうだったの……。そしていまどうしているのかしら」

「さあ……。わたしがここにいなければ、耀ちゃんを探し出していたかも知れないけど、そうしなくてよかったかもしれない。耀ちゃんはいま気持ちの整理に追われているかもしれないけど、この経験でひとまわりもふたまわりも大きくなったんじゃないかしら。会うのが楽しみだわ」

「耀とも話すことができればいいのに」

「こんど会ったときには、耀ちゃん、きつとそうするわよ」

木実子が耀と会話したくとも、耀が自分から木実子と一体同化しようしなければ、それは不可能なのだ。未佐が自ら木実子と一体同化したのはA

IDの情報を取るためだった。だが「黒の集団」が見張りをしているため、未佐はいまだに木実子から抜け出せずにいるのだ。

「あなたはこうしてここにいるのよ。どうして耀と一緒にじゃないの」  
幾分いらいらした声だ。

そろそろ潮時だった。未佐は今夜にも見張りが眠った隙に抜け出そうかと考える。でも見つければ木実子たちふたりにも累が及ぶだろう。それが心配で、延ばしに延ばしてしまっていたのだ。

今夜決行しよう。それにしても、ハクリはどうしたのかしら。  
未佐は夜が更けるのを待った。

「黒の集団」が未佐を捕まえようと一軒家を襲った。そのとばしりを受け、木実子と森野は捕らえられ、一時両手足を縛られて猿轡を嵌められて監禁されたが、未佐を探し出すことができず、すでにふたりは解放されていた。だが「黒の集団」は、いまだに一軒家の見張りを止めようとしなかった。

未佐はじつと待つ。待つ身には時が進むのが遅い。彼女は木実子の記憶のメモリーをリセットする。これで準備はすべて整った。

「ミサ、聞こえるか……」

「あ……、ハクリなの」

「ハクリだ。いま上空にいる。そちらはどんな状態……」

「今夜、抜け出そうと準備していたところです。見張りが嚴重といった感じだし、一軒家の周りにはいくつものバリアが設置してあるようですが……」

未佐はかいつまんで現在の状況を報告する。

「了解。五分後に敵のパワーを一端遮断するが、敵に気づかれないように五秒直ぐ復旧する。その間に一軒家から脱出するように。いいね。時計は

あるね。いいかね。はじめるよ。三……二……一……ゼロ。合わせたかね。では五分後に飛び出すんだね」

未佐はもう一度木実子との会話の記憶を消したことを確認する。それから眠っている木実子から抜け出る。できるだけ身を低めて、壁際を伝い、窓際に近づく。

見張りのテントに明かりが見える。

残り二分だ。窓の隙間から一気に上空を目指そう。

彼女は息を潜め、秒針の動きを見守る。

残りが三〇秒を切る。二八……、二〇……、一〇……、五……四……三……二……一……。

テントの明かりが突然消えた。今だ。

未佐は一目散に天空を翔け上る。

## 第四章

40

「オレは『どこの馬の骨とも知れない男』の子か」

耀は木実子の気持ちに分からなかった。なんともやりきれなかった。どうしてそんな子を産んだんだ。それまでして子が欲しかったのか。それにしても生まれた子の気持ちを考えることはなかったのか。

彼は次第に投げやりになり、自暴自棄になっていく。ホテルのバルコニーから蹴り飛ばしたAIDキットの小箱のように、自分自身を蹴り飛ばし、天空を目的も意図もなく、ただひたすら彷徨いつづける。

自分の存在を消してしまいたかった。自分がいなければ、自暴自棄になることもない。そうなれば、もう自暴自棄せずすむのだ。

自分の出生を肯定したくとも、もはや肯定することができなかった。自分の生まれを誇りに思うことはできなかつた。それどころかむしろ汚辱にすら感じるのだった。

こうまでして産んでくれた母を恨めしく思った。

「ぼくは一生どこの誰か分からない男の子というレッテルが貼られて生きなければならぬのだ。あなたはAIDまでしてどうして子どもを産み出したかと思つたのか」

木実子に聞いてみたかった。

彼は意識を捨て、小さな浮遊粒子となつて、風の吹くまま、あてもなく天空を浮遊しつづける。

太陽が沈み、ふたたび、太陽が昇る。何度も繰り返される天空の営みのなかで、やがて彼は、自分の儚かさを知った。と同時に、儚いながらも存在している自分の確かさをいやというほど感じていた。

それはまるで、脱ぎ捨てたいと思つても、脱ぎ捨てることのできない服を纏っているもどかしさだった。

どんなに自暴自棄になろうが、自分がいるのだ。自暴自棄になればなるほど、自暴自棄になつていて自分を感ずることになる。やり切れなかつた。だがそれは自分自身の存在の証でもあつた。

存在を消すか、それとも自暴自棄をつづけるか。

彼は徹底して自暴自棄するほかないのだと思つた。こうして自分の存在を、そして自分が生きていてることを感じていなければならないのだ。そして終には、自分はAID児として生きるほかない、そしてこれが自分の運命のよきな気になつていく。

41

「ミサ、戻つたか。ハクリ、ご苦労さん……」

アムンは外に出て、ふたりを待つていた。執務室で「救出成功」という連絡を受けたものの、実際にふたりの顔を見るまで落ち着かず、とうとう外へ出てしまつたのだ。

「で、連中は……」

アムンはふたりを執務室に招き入れながら、ハクリを振り返る。

執務室は「天の基地」の片隅にあるこじんまりとした小さな建屋にある。

ドアを入ると、外観とは異なり、大きな空間が果てしなく広がっている。空間の大きさはその都度変化するようになっていくらしい。アムンはふたりを執務機の近くにあるテーブルに誘う。

「相変わらず、やつらは一軒家を包囲し、監視をつづけています。ミサの話では、なかのふたりはなんらの拘束も受けていないということです」

ハクリはミサに目を向ける。

「はい、その通りです。ふたりは全く自由に振る舞っていますが、外出はムリのようなのです。あれ以来、一度も外へは出ていないので、本当に外出がダメなのか分かりませんが、そんな感じですよ。なにしろ、家の周りにさまざまな仕掛けのバリアが幾重にも設置されていて、それらは簡単に解除できないように見受けられますので……」

「ふむ、それでミサはどうやって連中の目を潜り抜けてきたのかね」

一瞬、アムンの目が光る。

「電源を断つ方法でバリアを遮断して、その間に敵の目を潜り抜けて脱出してきたのですが……」

ハクリが口を添える。

「連中が感付くことがなかったかね」

「多分、大丈夫かと思いますが……」

ミサはアムンの目を覗く。

「ミサ、いいかね。連中を甘く見てはならない。今回はヨウのこともあるので急を要したが、連中と正面から向つては勝ち目がない。十分作戦を練つて当たるのだ。闘いは一対一できるように」

「一対一……ですか」

「一軒家を取り巻いている『黒の集団』全員を一度に相手しては、たとえば、

ミサがいろんな技を持っていてもとてまかなわない。それに連中はさまざまな最新鋭の武器を装備し、つねに携帯している。だから、どんな場面に遭遇しても一対一になるように工面するのだ。たとえば、大勢に襲撃されたときには一人しか通れない小道に逃げ込むとか、あるいは大勢の敵を一人で相手しなければならぬときには、敵が一人ひとりになるときを狙うとかして、極力、一対一の闘いに持つていくのだ。そうすれば、簡単に負けることはない。ハクリ、ミサを頼んだぞ……」

アムンはこんなことを言いながら、別のことを考えていた。いま指摘したことは、今回の一軒家のような場面での戦闘方法だったが、だがこんなことは今後とも滅多にないにちがいない。とはいっても、いざという場合に備え、ミサを訓練しておきたかったのだ。

「これまでのところ、『黒の集団』は一軒家のふたりには危害を加えていないようにみえるが、このような状態がいつまでつづくか分からない。ヨウがふたりを訪ねてくるのが分かれば、連中もふたりに対して決して宥赦しないだろう。連中の行動をみると、連中はすでに両者の関係に感付いている節がある。ミサ、どう思うかね……」

アムンはミサに目を据える。だが彼はミサを見ていなかった。ミサを通してやがて訪れる未来を覗いていたのだ。

「ミサ、あのふたりにも協力してもらわなければならないことがある。だから、こう言うてはなんだが、連中がふたりに容赦ない仕打ちをしてくれたほうが話が早いかもしれない。とにかく、今後の作戦計画にはふたりの協力は欠かせないのだ。いいかね……」

アムンはミサに念を押すように言ってから、ハクリに目を移す。

「以前、『黒の集団』が世界帝国建設のための拠点を日本につくろうとし

ていると話したことがあってね……」

アムンはつづけて、こんな話をした。それは「黒の集団」が今後仕掛けてくるだろうと考えられる戦略に関することだった。

「黒の集団」は暴力的手段を用いて日本政府の転覆を計ろうとするのはまずあるまい。それよりも、平和裏に日本を乗っ取るようにするにちがいない。そしてそのために日本の権力中枢にいるものをあらゆる手段を用いて籠絡しようとするだろう。

現在、日本の権力構造の中心にいるのは政治家や財界人などではない。官僚だ。官僚組織が日本の権力を握っているのだ。彼らは一〇〇年かけてこの国に官僚帝国を築いてきた。だが日本の官僚組織は事大主義、権威主義で凝り固まり、いまもって無誤謬性、秘密堅持で官僚制を維持しようとしているが、問題はこのようなシステムはまた変化に対して極めて脆弱なことだ。

連中は弱点を突いて、官僚の籠絡を計ることだろう。こうして「黒の集団」は日本を意のままに操作し、世界帝国の拠点化を推し進めようとするにちがいない。

これに対抗するには、フィジカルな戦闘力だけでは足りない。メンタルな知力が欠かせない。これを一層高めることだ。

それに現実世界との係わりを密接に保つ必要がある。このために一軒家のあのふたりの力が必要だ。ミサとヨウはあのふたりと協力して「黒の集団」の野望を打ち砕くのだ。あのふたりはこの作戦には欠かせない戦力なのだ。

「ハクリ、一軒家のふたりと、ミサとヨウとがそれぞれ合体してより強力な力を発揮できるように仕込んで欲しいのだ。合体したふたりを超々人

(ウルトラスーパーマン)にしたいのだ」

アムンはハクリとミサを交互に見ながら、念を押すように自ら大きく頷く。

4 2

「ぼくの生みの親は……」

突然、出生について疑念が湧いた。疑念を振るい落とそうとするかのようになり、耀は激しく身を震わせる。だが一度湧いた疑念は止まることなく大きく広がっていく。

「そんなことがあってたまるか」

彼は木実子の顔を思い浮かべ、疑念を否定する。

「ママはママに決まってる」

「ホントか。どうしてそう断定できるんだね」

もうひとりの彼がちよっかいを出す。

彼は次第に落ち着きを失い、翔ることを忘れ、天空から猛スピードで落ちていく。地面に激突して、彼はようやく我に返った。

疑念から逃れるためには、自分の出生を自分の目で確かめるほかない。出産に立ち会って、自分の出生の瞬間を確認するのだ。

彼は身を起こすと、ポルダール出張から六か月後にセットして、ふたたびタイムスリップする。

産業廃棄物を野焼きしているのか、突然悪臭がつーんと鼻を突いた。煙が一面に漂っている。彼は団地の上空から見覚えのある戸建ての一軒をめ



がけて近づいていく。そしていつものように、リビングに入り込む。

女がふたり、テーブルに向かい合って座っている。貴世と木実子だった。彼の祖母と母になるふたりだ。

「臭うわ。風向きが変わったのかしら」

木実子が眉間にしわをよせ、甲高い声を上げる。野焼きの煙が室内に流れてきたのか、微かに悪臭がする。

「そお……。敏感ね」

貴世は鼻をびくつかせるが、臭わないのか、何事もないように、せんべいを摘み、お茶を啜る。

「お母さんは鈍感ね。それとも鼻が悪いのかしら」

「まあ、妊娠しているからじゃないの。そのせいよ、敏感なのは」

木実子はむっとした顔をして椅子から立ち上がると、リビングを出ていく。

耀はじつと後ろ姿を見送る。まだお腹は目立つほど大きくない。本当に妊娠しているのだろうか。

彼は貴世の顔を覗く。不機嫌そうな顔だ。だが確か「妊娠している……」と言っていたはずだ。このことと祖母の不機嫌とは関係があるのだろうか。

娘の妊娠に不機嫌さを隠そうとしないのは、それがAIDによるものだからか。

彼は木実子のまだ目立たないお腹を思い浮かべながら、しばらく不機嫌そうな祖母の顔を見ていた。

もし妊娠していたとしても、あのお腹ではまだ何日かかるか分からない。出産は四か月後か五か月後だろうか。その間、木実子のお腹を気にしながら、祖母の不機嫌そうな顔と付き合わなければならないのか。

耀はもう一度設定し直して、ふたたびタイムスリップする。

目の前に、大儀そうに歩く木実子がいた。お腹を見た。ぱんぱんに大きくなっている。心臓がドキドキした。出産間近にちがいない。

「お母さん、なんだかヘンだわ。そろそろ病院へ行こうかしら」

「まだ、早いんじゃないの。陣痛はまだなんですよ」

「陣痛って、ひとさままじじゃないの。お腹がなんかヘンな感じだわ……」

「そう。じゃ、そろそろ出かける……。病院に連絡してみるわね」

病院の都合なのか、医師の診断の結果なのか、木実子が入院したのはそれから一週間後だった。その間、木実子は自宅で陣痛と闘う羽目となる。

自宅待機となった一週間、時折、陣痛らしき痛みが木実子を襲ったが、初産の木実子には明確に陣痛かそうでないかを区別することができなかったらしい。このことがあとで問題となった。

夕食の時間を前に、貴世は食卓に食器を並べ、食事の用意に余念がなかった。

「わたしはいらないわ。ああ……」

椅子に腰を下ろしていた木実子が両手で食卓の端を押さえ、悲鳴を上げる。突然、激しい痛みが襲ったのだ。時間を追って、ますます痛みが増していく。

「お母さん、救急車を呼んで……」

とうとう痛み到我慢でまず、木実子が叫ぶ。

だが病院へ搬送されたときには、なぜか痛みが弱まっていた。分娩が停止したのか、陣痛が殆ど感じられなくなっていたらしい。

「なぜ、もつと早く病院に来なかつたのですか」

診察した医師が顔を曇らせた。母体も胎児も危険な状態だという。

「先生、助けてください。娘も孫もなんとか……」

貴世は搾り出すような声で縋り付く。

医師は「自力で分娩できなくなっているので、胎児はもちろん、母体のためにも、緊急に帝王切開するほかない」と告げると、手術の準備が始める。

耀は心臓をドキドキさせて、ずっとそばで木実子を見守っていた。木実子が痛みに耐えるとき、彼もじつと痛みに耐えていた。

「帝王切開……」

彼には想像もつかない。

白い布で覆われて手術台に載せられた木実子には心拍数や血圧などのさまざまなモニター端末が付着され、麻酔用のマスクが嵌められた。麻酔がはじまる。

下腹部を覆っている白い布の一部が取られた。張り裂けんばかりに大きく膨れている腹部が露出する。

緊急を要する手術だ。露出している腹部の中央部を念入りに消毒を施す。

皮膚が縦に切開された。つづいて、皮下組織だ。そして筋膜、腹膜と切開していく。いよいよ子宮筋切開だ。子宮頸部のやや上を横に切開する。

胎児が見えた。子宮の上部を軽く押し、胎児を娩出させる。臍帯を結紮して切り離すと、胎児を待機している看護師へ手早く手渡した。

「おう……」

耀は思わず声を発し、血まみれの赤子の行き先を目で追う。だがまだまだ手術は終わらない。

胎児を取り出した子宮のなかにはまだいろいろなものが残っている。胎盤など血の固まりのような内容をきれいに除去しなければならない。口

を開けた子宮から血液の混じった大量の液体があふれ出る。いまだに出血しているのだろうか。

「ママ、大丈夫？」

咄嗟に声をかける。

子宮内に出血箇所がないか。出血箇所には止血を施し、切開した子宮筋が縫い合わされていく。

止血を確認して、腹腔内の洗浄が行われる。

術後の予後対策のための薬剤が注入され、そして腹膜、皮下組織、皮膚の縫合だ。切開したときと逆の順で、腹膜から縫い合せていく。

「無事済みましたよ……」

手術室から廊下に出てきた執刀医が貴世に声をかける。

「それで……」

「母子とも大丈夫でした」

「有り難うございます……」

執刀医は貴世の縋り付くような目に微笑みかけ、そそくさに去っていく。

手術室から移動用のベッドに載せられた木実子が運び出されてきた。

「木実子……」

貴世が近寄って、ベッドを覗き込む。木実子は血の気のない白い顔で、力なく薄目を開けているのか。開いているようにも見えるが、よく分からない。

「麻酔が完全に取れるまでもうしばらくかかります。男のお子さんでしたよ」

付き添ってきた年嵩の看護師が貴世に笑顔を向ける。問いかけようとする貴世を制するように、早く病室へ運ぶように若い看護師に目配せする。

キャリアア付きベッドは二人の若い看護師に押されて近くのエレベーターに乗せられ、三階の病室へ向った。

43

耀の心臓はまだドキドキと高鳴りしていた。

「おう……」

大きく膨れ上がったお腹がメスで何度も切られ、血まみれの赤子が取出されたとき、彼は思わず声にならない声を洩らしたのだった。

彼はその場面を何度も繰り返し思い返す。

「木実子はぼくのママだった……」

彼はほっとした気持ちだった。と同時に、だが、なにかしら物足りない気持ちどこかにあった。

「ぼくを産むために、木実子は敢えてAIDを選んだのだ。そしてAIDで宿したぼくを何か月もお腹に抱え、激痛に耐え、最後に腹を切り裂かれてしまったのだ……」

彼はまるで自分の腹にメスを入れられたように感じ、身をよじる。

「木実子は自分の生命を賭けて、ぼくを産もうとしたのだ。自ら自分の血でぼくを沐浴させて、地上に送り出したのだ……」

彼は彼女の血を全身に浴び、全身血まみれになった自分を目に浮かべる。

突然、戦慄が走った。全身が激しく震えた。そして得体のしれないものが全身を通り抜けていった。

彼はなにが起きたのか、分からなかった。ただ彼はなにものかに圧倒さ

れたようにその場に倒れ込んだ。

彼は木実子の強い意志を感じた。

「ぼくは彼女(母)の強い意志のもとに生まれ出たのだ。彼女はどのようにぼくを産みたかったのだ……」

彼は母になろうとする木実子の意志のまえに、自らの出生も出自の秘密も色あせていくのを感じた。

いままでどこかのどこかにAID児であることがひかかっていた。だが木実子の強い意志を知って、その思いも遠い彼方へ去ってしまった。

確かに、AID児には父親が誰か分からない。出自が不明だからと言って、自分という存在まで否定されることはないのだ。また、ここにいる自分が消えてしまうわけではない。ここにいる自分が自分の全存在なのだ。これがすべてなのだ。

彼はそう思うことにしたのだった。

44

「ハクリ、耀は自分がAID児であることを知って、自分の出生にも疑いを持ち、自分の目で確かめようとしているのじゃないでしょうか。もうすでに自分の出生に立ち会ってしまったかもしれないわ」

「ミサの言う通りかもしれない。もしそうだとしたら、ヨウはもう直きここに戻ってくるだろう」

ハクリはミサを見て確信あり気に頷きながら、微笑む。

「そうでしょうか。そうだったらいいのですが……」

「うん。まあ、ヨウが戻ってから本格的に始めるが、そのまえに言っておきたいことがあるんだ。とくに、例の一軒家のふたりと組んで、いや、アムンは合体してと表現していたが……」

ハクリはヨウが当然戻ってくるかと決め、ミサを相手にすでにウルトラスーパーマン養成講座を始めるつもりなのだ。

「あのふたりはダイオキシン汚染、それも産廃処理場の小型焼却炉をターゲットとしていたが、『黒の集団』との闘いになると、もつと広い範囲に視野を広げ、問題の所在と因果関係を徹底して見極めなければならないのだ。そうでないと、ある問題に対して一生懸命やっても、大きな問題を見落としていることがあるし、敵は小さな問題を利用してそれに隠れて大きな問題を推し進めることが往々にしてあるからだ……」

ハクリはダイオキシンの例にとつて、こんなことを話した。

日本では、一九九〇年代に、産廃処理場からのダイオキシン排出がマスコミで取り上げられて大問題化した。これでゴミの焼却処理に社会的関心が集中した。そのかげで、従来から影響が懸念されていた農薬に由来するダイオキシン類の問題が隠れかけてしまった。

実は、これには巧妙なからくりが隠されていた。

ダイオキシンには種類が実に多く、発生源によつて排出されるダイオキシンの種類がまちまちである。そこで毒性という尺度で、種類の異なるダイオキシンを一本化したのが、TEQ（毒性等量）という計算方法だ。

ダイオキシンのTEQでは、ダイオキシンのなかでも一番毒性が強いといわれるダイオキシン（2・3・7・8四塩化ダイオキシン）の毒性を「1」とする。そしてこれを基準にその他のダイオキシンの毒性係数を決め、種類の多いダイオキシンを毒性から統一的に評価しようとするのである。

る。

これによると、毒性係数の低いものやゼロのものは、たとえどんなに多くの量が環境に放出されても問題になることがない。量がどんなに多くても毒性が無いか、あるいは極めて少ないからだ。

毒性が無ければ、あるいは極めて少なく無視できるものであれば、それで問題がないだろう。だが問題はなにをもつて毒性としているかだ。ダイオキシンの毒性をなにで評価しているかだ。

当時のTEQでは催奇性や発ガン性などに重きをおいていたが、これでは偏ってしまう。まだ分かっていない毒性や不明な毒性が無視されてしまふのだ。これまでもあとで分かって大問題化した例がいくつもあるではないか。

農薬のなかにはさまざまなダイオキシンが存在する。一例をあげると、たとえば、有機塩素系除草剤クロロニトロフェン（CNP）からは1・3・6・8と1・3・7・9四塩化ダイオキシンといったダイオキシンが発生するが、ことに前者のダイオキシンは各地の土壌から高濃度で検出されている。だがさきのTEQでは毒性がゼロ評価となるのだ。

「このように、TEQとか、国等が決める各種の基準なんていうものは、不完全なもので、よく言っても、ひとつの目安にすぎないものだ。ひどいのは意識的にこれを隠れ蓑に利用しているのもあるので、要注意だ。それともうひとつの決定的問題は、これが最大の問題かも知れないが、それらは個々のものを個別に対象にしているだけで、これらの相互の関係が完全に無視されていることだ……」

そしてハクリは複合的な影響を指摘した。たとえばこうだ。ダイオキシンに限って言えば、二〇〇種類を超えるさまざまなタイプのダイオキシン

があるが、これらの複合影響（たとえばTEQにおける複合的毒性）が全然考慮されていないのだ。

環境にはさまざまなダイオキシンが排出される。それゆえ、さまざまなダイオキシンによる複合的な影響が当然考えられるのに、これが考慮されていないのだ。これはダイオキシンに限ったことではない。

未佐はふと、彼女が助手として仕えていた土田教授の顔を思い浮かべる。キザでいつもネクタイを気にしていた中年男だった。

教授は彼女が複合汚染の問題を尋ねると、いつも「それはいまの科学ではムリだ。まあ、科学の限界といってよいな。それに複合影響には相乗的に作用するものもあれば相殺的作用も考えられるから、差し引けば無視することもできるし……」と喋ってお茶を濁していた。

「大分横道に逸れてしまったが、『黒の集団』はこんな専門的な手段を弄することもなく、社会的心理的なさまざまな手段を多く用いてくることだろう。あのとき、『黒の集団』は産廃処理場からのダイオキシン排出問題をマスコミに大々的に取り上げさせるといふ戦術を用い、TEQの問題点を利用することなく、農業のダイオキシン問題をうやむやにすることに成功したのだ。いや、これだけではないかもしれないぞ。さらにうやむやにしようとしているものが隠されているかも知れない。やつらのやることはつねに裏の裏まで考えて対処しないと、いつ裏をかかれるか分からないのだ。十分注意することだ。要は、一見もつともらしいものでも、その裏にはいろいろなからくりが隠されているということだ。『黒の集団』もこの種の仕掛けをフルに利用して攻めてくるだろう。だから、それを見破る『術』をつねに磨かなければ到底太刀打ちできないということだ」

ハクリはミサが集中力を途切らせていること気づいたのか、長々つづけ

た話を自ら打ち切ってしまった。

45

未佐は迷った。耀を探しに行きたかったが、もうすぐ戻るといふハクリの指摘に、こころが激しく揺れたのだ。耀が自分の意志で「天の基地」に戻ってくれば、彼自身の自立の旅もようやく完結することだろう。だが途中で迎えにいけば、自立の旅を妨げ、彼の自立にちよつかいを入れることなりかねない。

かといって、耀が必ず戻るといふ保証もないのだ。耀に甘いかも知れないが、このことが彼女を迷わせるのだ。

未佐は迎えに行きたくて仕方がなかった。彼女は落ち着きを失い、辺りをぐるぐる歩き回る。

離れたところから、ハクリがじつと見守る。自ら落ち着きを取り戻すまで待つほか無いのだ。

「あのふたりを一軒家に置いてはまずいんじゃないかね。ミサとヨウが行くたびに連中が妨害しようとするだろう。そんなことになったら、ふたりとの合体どころの騒ぎではない」

遠くからそんなミサを見ていたのか、アムンがハクリを呼び寄せ、ふたりを秘密裏に「黒の集団」に分からない別のところへ移すことを命じる。そしてミサを連れていくといい、という。

「ミサ、一軒家のふたりを他所へ移したいのだが……」

「え？」

振り返ると、すぐそばにハクリがいる。全然気付かずにいたのだ。

「アムンがそう言っている……」

「アムンが……」

未佐は周りを見渡し、アムンの姿を探す。こころのなかを見透かされていたような気がしてアムンを探すが、その姿はどこにも見当たらなかった。

「なんだつたら、ヨウを連れていってもいいが……」

「耀ちゃんが戻ってきたの」

「まだだが、もうしばらく待つてみて、戻らなければ探しにいつてもいいかな……」

未佐はじつとハクリを見る。ハクリにも感付かれてしまっていたのか。

彼女は恥ずかしかつた。そのとき、彼女は自分自身が耀から離れることができず、いまだに自立できずにいる自分を知らされたのだった。

耀の自立を妨げていたのは自分ではなかつたのか。彼女は激しく自分に問い質す。辛いことだが、今後はいままでのようにはできないのだ。耀と是一对一の関係を保とう。そうでなければ、彼はいつまでも自立できないのだ。いや、自分自身が自立しようとしなければ、耀の自立を妨げることになるのだ。辛かつた。

「耀ちゃんを連れていけば、かえつて目立つんじゃないんですか。『黒の集団』に見つかつてしまうかもしれない」

「そおう……」

ハクリがミサの目を覗き込む。彼はしばらくじつとミサの目を見ていたが、やがて「じゃ、準備しようか」と言つて、歩き出した。彼女は黙つて、その後を付いていく。

目の前に、大きなスクリーンが現れ、湖畔の一軒家が映し出された。な

かを覗くと、リビングに木実子と森野の姿があつた。ふたりはソファでじつと同じ姿勢で湖面を眺めている。

「ふたりはまだ軟禁状態に置かれているのかしら」

未佐は呟く。

「やつらはどうか。どこにいる？」

ハクリは一軒家の回りのチェックをはじめ。

「どこにも『黒の集団』の姿が見えませんが……」

「おかしいな。やつらはどこへ行つたんだ。もう見張りを止めたのかな。もしかしたら、見張りを遠隔装置に切り替えたのかな。それとも……」

ハクリは画面を変えたり、ズームアップしたりして細かくチェックする。

だがそれらしいものは見つからない。

「対岸の方はどうかしら」

対岸の湖畔が映し出された。「黒の集団」が設営したテントや車両が置かれてあつたところだ。だがここにもそれらしい形跡はなにも残されていない。土台、そんなものが置かれていたことさえ疑わしいほど、跡形もな

「これでは一度現地へ行つて調べるほかないか」

ハクリはミサを振り返る。

「完全に撤退したのでしょうか。それとも……」

「なにか仕掛けているかもしれないな。でも、画面からはやつらがどんな仕掛けをしているか分からないしな……」

「あのときは一軒家の周囲に赤外線のパリアを張り巡らしていたけど……」

「うん。『黒の集団』に重大な作戦変更があつたのかな。それとも場所を

変えてどこかに潜んでいるのかな。とにかく、ミサ、行つてみよう。すべ

てはそれからだ」

アムンへの報告を済ませると、ハクリはミサを促し、天空へ翔け上がる。

46

耀は天空を翔け回る。何度も同じところをぐるぐる回る。東の空が白みはじめた。見慣れた家を探し、急降下していく。

リビングには誰もいない。祖母の食べかけなのか、食卓のうえに食器が雑然と置いてある。食事中に慌てて出かけたのか、お椀にはみそ汁が残っているし、皿にはまだ箸のつけていない焼いた鮭の切り身が載っている。

耀は救急車を呼んだときの情景を思い出した。そうだ。祖母が夕食の準備をしているときだった。木実子は食欲がないのか、自分の分はいらなうと言った。そしてその直後に激しい痛みに襲われたのだった。

それからのことをもう一度ゆっくり反芻してみる。それにしても、まさか木実子の腹を割って自分が生まれてくるとは思ってもみなかった。

AID児騒ぎどころではなかった。そんなことはどこかへ吹っ飛んでいった。

彼はリビングの片隅に腰を下ろし、壁に背をもたせ掛ける。

しんとした音ひとつ無い。彼は臉を閉じる。眠りに落ちていく。

木実子が現れた。微笑んで、お出でお出でをしている。母の元へ行こうとするが、なかなか立ち上がれない。仕方なく立つのを諦め、はいはいして母に近付いていく。だがなかなか母の元に届かない。近付いたかと思うと、母はさらに遠くへ離れてしまっているのだ。

はいはいしていた赤ん坊がいつの間にか大きくなっている。幼児は全力で母の元に走っていく。何度も何度も近付こうと試みる。だがなぜか、どうしても母をつかまえることができないのだ。

目を覚ますと、体中が汗でびっしょり濡れていた。目を上げると、いつ戻ったのか、食卓に祖母貴世の姿があった。

耀は無性に母に会いたかった。

47

「わたしがおとりになって、やつらのテント跡地や一軒家の周りをゆっくり歩き回るから、ミサは上空で変な動きがないか監視しているように。いいね。なにか変化が見つかったら、直ぐ連絡するのだ。やつらがどこからか現れても、あるいはやつらの仕掛けが作動しても、勝手な対応はしないように。分かったね。なかのふたりに危害が加わるといけないからね」

こう言い残すと、ハクリは急降下していった。未佐は上空にとどまり、監視をつづける。

ハクリは一軒家の周りを遠回りしてから、建物に次第に近付いていく。

窓からなかを覗いている。

なんの変化もない。未佐は次第に高度を下げていく。

「待て。そんなに高度を下げるな。なにかヘンだ……」

ハクリはベランダへ回っていった。ガラス戸を静かに引いている。

突然、ハクリの姿が消えた。僅かの隙間から、リビングへ忍び込んでいったらしい。

未佐はさらに高度を下げる。

「ミサ、いいよ。下りてきなさい」

ハクリの声がした。

「どうかしましたか……」

ハクリはガラス戸のところに立ち止まったまま、なかのふたりを指さしている。

「全然動かない……」

「ふたりにはわたしたちが見えないのよ。声も聞こえないわ」

未佐はリビングへ入って、ソファに近づく。

「あ、これは……」

よく見ると、巧妙につくられた等身大のふたりの人形だった。

「ミサ、近付くな。触るな。危ない。戻るんだ。近づくものをキャッチして、点火する仕掛けをしているかもしれない」

ハクリは手を長く伸ばして未佐をぐいと引き寄せると、急いで一軒家を飛び出し、天空へ急上昇する。

「……………」

未佐は声が出ない。一軒家は爆破するかと思うと、気が気でなかった。

「人形には爆弾が仕掛けてあるかもしれないのだ。ふたりを訪ねてきたものを狙った仕掛けか」

未佐はひたすら上昇をつづける。

不意に、耀の顔が浮かんだ。彼が一軒家を訪ねて来たらと思うと、彼女はそのまま上昇をつづけることができなかつた。じつとしておれなかつた。

一軒家が爆破していないことを見定めると、彼女は急降下していく。

「ミサ、どこへ行く。待て」

ハクリの声がした。未佐は急降下をつづける。

目の前に、ハクリが現れ、立ち塞がった。未佐はハクリと正面衝突する、と思った瞬間、ハクリの手のなかに抱えられていた。

「どうしたんだね、ミサ」

ハクリはゆつくり未佐を草むらに降ろした。

「耀が……」

「ヨウが……。どこに……」

「耀が知らずに、人形に触るかも知れない……」

「そうか。このまま人形に気づかない振りして、逆に、やつらをおびき寄せようかと思ったけど、そのまえにヨウがここに来るかも知れないね。ミサ、どうする？」

未佐は一軒家を見上げる。

「ふたりはどこへ行ったのかしら。それとも『黒の集団』に拉致されたのかしら……」

「われわれをおびき寄せるために人形を作って置いてあるとすれば、ふたりに逃げられたからとも考えられるが……」

「そうかも知れないわね。でもふたりが逃げ出すために、自ら人形を用意したとも考えられないかしら」

「ふむ、なるほど」

「家のなかになにか手掛かりになるものが残されていないでしょうか」

ふたりはベランダに入っていく。

「一寸、待て。人形になにか仕掛けがないかチェックしておこう」

ハクリは未佐を外に待機させ、ガラス戸の隙間からリビングへ入る。そこで立ち止まり、目で辺りをチェックしはじめた。



未佐は外からハクリの動きを追う。

一瞬、異様な空気の流れを感じた。彼女は上空を見上げる。太陽が輝き、晴れ上がっていた空に黒い雲が物凄い勢いで広がり出していった。

突風が吹く。雷光が走る。強風に樹木の小枝や葉が千切れ、塵芥や砂塵が舞い上がる。雹につづいて、霰交じりの大粒の雨が降る。湖面に水しぶきが立った。

「ハクリ、空模様がおかしいわ。嵐かしら……」

突然、黒い雲から漏斗状の雲が垂れ下がり、近付いてくる。風が渦を捲いて湖面を駆け抜け、黒い雲から伸びた漏斗状の雲が湖水を吸い上げる。

大量の鳥や木の枝、それに木片や金属片など、大小さまざまな破片が空中に舞つてる。

「ミサ、竜巻だ」

ハクリが未佐の手を引き、窪みに伏せる。

ゴーツという音を発して風が通り抜けた直後、バリバリという音が響く。

漏斗状の雲が一軒家を直撃したのだ。その瞬間、一軒家が一瞬間に浮いたかと思うと、バラバラに分解して大小の破片と化し、天空へ吸い込まれていった。

竜巻が通り過ぎた跡には、一軒家のコンクリートの土台さえ残っていないかった。

48

耀は母に無性に会いたいと思った。だが、彼はじつと我慢した。ここで

木実子に会ったら、ふたたびまえの自分に返るようで怖かったのだ。

彼は自分の出自を探る旅のなかで、木実子に対する意識を自ら大きく変えていつていった。それは彼と木実子との関係の変化でもあった。

意識の変化を反映して、彼のこのころのなかでの木実子との関係も変化していく。これに対応して、木実子に対する呼称が「ママ」から「ママ木実子」となり、そしてAID後、ついに突き放して、ママでないひとりの女性「木実子」になった。だが出産の場面に立ち会い、彼の意識のなかで木実子とふたたび密接な関係を回復し、「母」と「子」の関係を取り戻していったのだ。

それでも彼は「天の基地」へ戻るまえに、母を一目見たかった。だが会ってはならないのだ。

彼は必死になって、母への思いを抑えようともがく。だがもがけばもがくほど、思いが募る。このころのなかで騒めき、さざ波が立ち、次第に大きくなっていく。

リビングの壁に背を押し付け、彼はぼんやりと食卓の祖母貴世に目を向ける。考えることはなにもなかった。彼はじつとこのころのなかのさざ波が収まるのを待った。

だがさざ波は収まるどころか、かえって大きくなっていく。彼はとうとう我慢しきれなくなって立ち上がる。「天の基地」へ戻る途中で、湖畔の一軒家の上空を通り抜けていこう。これなら別に問題はないだろう。

こうところに思いながらも、まだ迷っていた。

タイムスリップの旅はあまりにも長かった。終止符を打とうと思っても、タイムスリップにタイムスリップをなんども重ねたために、どこが起点でどこが終点か、判然としないのだ。

ようやく決心して、彼はこれまでのすべてのタイムスリップをクリアにするリセットのボタンを押す。時間が前後して、目紛しく場面が入り替わる。

彼は天空を目指して舞い上がる。

眼下に見覚えのある湖が現れた。奥の幾分くびれた形の北側の湖畔に一軒家があるはずだ。ベランダからガラス戸越しに母を一目見ればいいのだ。こう思い、彼は高度を下げていく。

だが一軒家が見当たらない。一瞬、彼は間違っただけの湖畔にいないかと思った。急いで対岸へ行ってみるが、そこにも一軒家はなかった。

ふたたび一軒家があったはずの湖畔へ戻る。

よく見ると、一軒家の跡のような凹みがあった。土台がすっぽり抜けたような跡だった。そこだけが土が剥き出しになっている。あたりにはさまざまな大きさの木片やトタンの切れ端、瓦やガラスの破片、靴やサンダルなどが飛び散っていた。

樹木の小枝や葉が千切れ、散乱している。根こそぎ倒れた老木や大枝をもぎ取られた大木もあった。

湖面にもさまざまなものが浮いている。向こうから小型のボートが近付いてくる。

彼が近付くと、ボートには消防士が二人乗っていた。ボートの先端にしがみつき、彼は二人を見守る。

「あの一軒家も竜巻で飛ばされたのか……」

湖畔に目を向けている一人が呟く。

「確か、あそこには中年の夫婦が住んでいたようだが、湖に浮いているとい

うのはその夫婦ではないだろうな」

もう一人は湖面を一心に見回している。竜巻の被害者か、遺体らしいものが浮いていると通報があったらしい。

竜巻の被害者の「夫婦」というのは木実子と森野のことだろうか。彼はあのふたりが夫婦だなんて、思ってもいなかった。それにしても、一軒家が竜巻で飛ばされたとは、一体どうなっているんだ。

「あ、あそこに……」

指差す方にまるみを帯びた黒い物体が浮いている。ボートが近付いていく。

「遺体か……」

「うむ……、なんだ、これは……」

縫いぐるみのような衣類の塊だった。

「あ……」

彼は思わず叫び声を発した。水に濡れて色が変わっていたが、木実子もいつも着ていたブラウスの柄と同じものだ。

ボートは湖面を行き来し、三時間ほど探索をつづけていたが、このほかそれらしいものを見付けることができなかった。

やがて、消防士はボートを岸に着け、探索をやめてしまった。

彼はもう一度湖面を見て回る。どこにも木実子の姿はなかった。森野もいなかった。竜巻のとき、ふたりはどこにいたのだろうか。家ともろとも竜巻に飛ばされてしまったのだろうか。

一瞬、彼はタイムスリップして、そのときの様子を見てみようかと思っただ。だがそれよりも、木実子がどこかで生きていると思いたかった。

木実子のことはいつでも探ることはできる。それよりも、早く「天の基

地」へ戻りたかった。

彼は両手を天空に翳した。そして舞い上がっていく。

49

「戻ったか」

アムンの高い透き通る声だ。執務机で書類を見ていたらしく、書類を閉じると、左手で机の片隅へ押しやる。そしてハクリと未佐に目を向けた。

「一軒家が竜巻で吹飛ばされて潰滅してしまいました。ふたりは事前にごかへ移動して留守の様子でしたが……」

ハクリはじつとアムンの手の動きを目で追っていたが、報告を了えると、同意を求めるように、未佐を振り向く。

「すると、ふたりの行方も生死も不明ということか」

「はい。生死を調べてから戻ろうと思つたのですが、まずはご報告と思ひまして……。それにどうもヘンなことがあります……」

「なんだね」

「連中の様子がどうもヘンなのです。急に作戦を変更したのでしょうか。とにかくヘンな感じがするのです。なぜか分かりませんが、一軒家の付近や対岸の設営地にも一人の姿もありませんでした」

「そうか」

アムンは予想していたのか、平然としている。

「あの……」

ヘンだ、ヘンだと繰り返すだけでのハクリに代わって、未佐が口を挟む。

「なんだね、ミサ」

アムンが目を向ける。

未佐はふたりの人形のことを話す。

「ほう。ソファに置かれていたというのかね。一体、誰の仕業かね。やつらの姿がなかったんだね、ハクリ」

アムンはいたつてのんびりとした口調をつづけている。

未佐はアムンをじつと見た。ふと、アムンはすべてを見通していたにちがいないと思った。そうでなければ、こんなにのんびり構えておれないはずだ。

「あのふたりはどこに行ったのでしょうか」

「さあ、どこに行ったのだろうね。ミサはどう思うかね」

「ふたりは生きていますよね」

思わず、未佐は大声を出す。

「多分、元気でいるんじゃないかな」

「やつらに拉致されたのではないのでしょうか。だから、やつらは……」  
ハクリの心配そうな声だ。

「ふたりを連れて、連中は姿を消したというんだね。ミサはどう思う？」

「誰がなんのために人形を用意したのでしょうか。これが分かれば問題は解決するのですが、それにしても『黒の集団』にとってふたりは必要だったのでしょうか。耀とわたしとの関係を知っていたとしても、それだけでふたりに対してあれだけの人数の戦力を投入するものでしょうか……」

「なるほど」

アムンは短く言って、微笑む。

未佐はその微笑みをみて、アムンがふたりの生死も行き先もすべてを承

知しているにちがいないと思った。もしかしたら、あの竜巻もアムンの差しがねだったのかもしれない。

「ミサ、ヨウが戻ったようだよ」

アムンは未佐のこのころの動きに気づいたのか、気をそらすように言った。

50

「ハクリ、ガラス箱よ」

未佐はハクリを促し、駆け出す。

耀がガラス箱のなかにいる。未佐が近付くと、笑いかける。

「早く、出てらっしゃい」

耀は座ったまま、じっとして動かない。

「ハクリ、早く出して」

「ヨウは出る方法を知っているよ」

ハクリは黙ってガラスの一面を押すと、扉のように開いた。未佐がかけ

寄って、耀を抱き起こす。

耀はしぶしぶ立ち上がる。耀はすっかり大きくなっていて。未佐より大きい。

「まあ、こんなに大きくなって……」

「『術』を使うようになると身体も大きくなるのだよ。ヨウはタイムスリッ

プを何度も繰り返し返したのだから」

ハクリはにやりと顔を緩める。

「……………」

耀はぼつの悪そうな顔をして、黙って立っている。

「ガラス箱や鉄の箱に入れられても、タイムスリップすれば箱から抜け出られる。そのまま時間を経過すれば自然に現在に戻れるからだ。ヨウはこれを自然におぼえてしまったんだね。一寸、寄り道が長かったが」

未佐は耀と話したかった。だがハクリが邪魔だった。

「ハクリ、一寸、いいかしら……」

「うん……」

ハクリは怪訝な顔を向ける。未佐の言っていることが理解できないらしい。

「耀と話したいことがあるの。ふたり切りにして欲しいの」

ハクリは不思議そうな目をしてしばらく未佐を見ていた。それから「分かった。終わったら、連絡するように。早速、『超々人』の訓練をはじめたいから」と言って、姿を消した。

51

いざ、耀とふたり切りになると、未佐はなぜか戸惑いを覚えた。

彼の図体が大きくなったせいだけではない。醸し出す雰囲気があるでちがつていたのだ。

彼はいつの間にか大人のような落ち着いた顔付きになっていた。出自から出生の瞬間はもちろん、いままでの生い立ちのすべてを知ってしまった顔だった。

彼女は違和感を覚え、彼の新しい顔にかつての幼い顔を重ね合わせる。

できたら、まえの顔に戻って欲しかった。

時折、馴れ馴れしい表情や仕草をするときもあるが、呼称まで変わってしまった。いままでとちがいが、「お姉さん」とか「未佐さん」と他人行儀に呼ぶ。

「耀ちゃんはずっかり大人になってしまったわ」

寂しかった。なにがそうさせたのか、彼女は知りたかった。だが無理に知りたいとは思わなかった。

じつと耀の目を覗く。淡い哀しみの色が浮いている。

「そうか。そうだったのか」

彼女はいまのままで気付かずにいたことを羞じた。

彼は自分がAID児であることを知り、自分の出生の場に立ち会い、AID児として生きることを決心したにちがいない。だから、「天の基地」に自ら戻ってきたのだ。自ら母木実子のもとから離れて「天の基地」に戻ることを選んだにちがいない。

いや、AID児であることから、木実子の子であることから、きつぱりと抜け出て、これからは「天の基地」の一員として生きることを選んだのだ。

それにしても、あの哀しみの色はなんだろうか。なぜ、哀しみの色なのか。彼女はあれこれ思いを馳せる。

「そうだったのか」

彼女は竜巻で跡形もなく霧散していった一軒家を思い浮かべる。

それはまるで深い霧のなかの一軒家が霧とともに消えていったようだった。そこにはもともと一軒家があったとは思えないほど、完璧なまでにひとつの痕跡も残っていないかった。

「耀ちゃん、あの一軒家は……」

「もう、いいんです。母は母ですから」

「よくないわ。竜巻のとき、あの一軒家に木実子さんたちはいなかったの。」

一軒家にはそのとき誰もいなかったのよ」

耀の目が潤んでいる。彼女はかけ寄って、抱きしめたかった。

「ハクリが待っていますよ。お姉さん、さあ……」

彼は背を向け、歩き出す。

52

アムンは執務机で両足を伸ばし、組んだ両手に頭を載せ、ひとり天球を覗いていた。考えあぐねたりするときの彼の癖だった。

「『黒の集団』がなぜ作戦を変えようとしているのか」

彼にはどうしても分からないことがあった。地球人たちはいずれ滅びるだろう。これは自明のことだ。

それなのに、なぜか彼らはさらに加速させて一刻も早く滅びたがっているようにみえる。いずれ滅びるのが分かっているのに、さらに自ら早く滅びてしまおうしているように思えてならないのだ。

実際、彼らの日ごろの行動を見ると、一心に自ら自分の首を絞め、滅びの助けをしているとしか思えない。一体それはなぜなのか。

地球人はほんの極めて短時間のうちに、地球環境を支配し、欲しいままに利用してきた。限られた資源を浪費し、森林を伐採し、土地を開発して大都市を建設したり、栽培型農業を行なったり、海洋では大量乱獲型漁業

などにより生物生態系を恣意的乱用したり、作り替えたりして、地球をわが物顔に貪り食い尽くしてしまっている。

その結果、地球環境は荒れ果て、ますます住みにくくなってしまっている。それにさまざまな化学合成物質を環境へ放出して、地球環境をすつかり汚染しているのだ。

悪化した環境は病原性ウイルスや病原菌などの変異や増殖の温床と化し、感染症大流行の危険が増大してきている。その一方で、人口の爆発的増加を招き、それにともない食べ物も飲み水すらも足りず、食糧問題や水資源問題が深刻化させているのだ。

かといって、食糧を増産しようにも、農地は酷使されて土壌劣化が進んでいるうえに、異常な大雨や大洪水が頻発して表土が流され、世界的に農地の絶対量が減少傾向にあり、世界的に穀物などの食糧不足が常態化している。また漁業においても長年の乱獲がたたり、漁業資源の枯渇に拍車がかかり、年々漁獲高が減少してきている。

さらに、地球温暖化による気候変動で世界の気温や雨の降り方が変化してしまった。時期や地域に変化が生じているばかりでなく、降水量そのものも変化し、大洪水をもたらすかと思えば、小雨、日照りがつづき、高温熱波が襲い、水不足を一層深刻なものにしているのだ。

地球人たちはなぜ自分の生存基盤である地球を大切にしないのか。自分たちはいずれ滅びるのだから、好き勝手に生き、いまのうちに贅沢三昧しようというのか。

「とすれば、地球環境を保護しようとするわれわれの戦略は、好き勝手に生きる地球人たちをますます増長させるだけではないのか。われわれはまるで『黒の集団』の手助けをしているようなものだ。作戦を変えるべきは

『黒の集団』ではなく、われわれの方なのではないか」  
アムンはますます迷う。

地球の状況がいよいよ逼迫して、「黒の集団」が生き残りをかける作戦を開始していたのに、早々にこれを変更する行動にでるものだろうか。遠からず滅ぶことが分かっているながら、なぜ無駄な足掻きをつづけるのか。

「黒の集団」は逼迫した状況のなかで、多くの人びとを犠牲にしても、自分だけが利益を独占しようとする作戦を変えてもがいているだけなのか。それとも起死回生の妙案を思い付いての作戦変更か。

極度に悪化した地球環境のなかで、最大利益を持続して確保するにはどうすればよいのか。どうすればそれが可能となるのか。

多くの人びとを犠牲することなしに、果たしてそれが可能だろうか。「黒の集団」は多くの人びとが犠牲になるのを承知で、なぜ足掻きもがこうとするのか。

地球人たちが自ら滅びようとするなら、彼は放っておきたかった。だが滅びたくない多くの人びとの犠牲に目をつむっているわけにいかないのだ。

なぜ「黒の集団」はかかる奇つ怪な行動を取ろうとするのか。彼にはひとつだけ分かったことあった。

それは自分だけは滅びの埒外にいたいと思っただけのことだった。同じ地球という舟に乗っていないながら、滅びるのは他人で、自分ではないと考えているのだ。

どうしてそんなふうに考えることができるのか、彼には不思議でならなかった。彼は口を閉ざし、天球を覗くほかなかった。

だが「黒の集団」に限らず、多くの地球人たちが独裁者のように振舞い、自分たちを育んでくれた地球を蔑ろにし、地球環境や生物生態系を台

無しにしていることは許せなかった。

地球は無数にある星のなかでも、極めて美しい星だ。その星を台無しにしようとしているのだ。

これ以上、地球人たちの横暴を許しておくわけにいかない。

アムンは強く思い、両足を引き寄せ、机に向う。

とにかく「黒の集団」のような行動は排除していかなければならない。だが単純ではなかった。

地球上の人口はすでに七〇億人を超え、やがて一〇〇億人に達する。この膨大な世界人口のもとでは、早晩、地球の資源は完全に枯渇し、食糧や水の絶対不足は目に見えている。

かかる状況下で、最大利益を持続的に確保するために「黒の集団」はどうしようとしているのか。どんな作戦をとろうというのか。

地球環境の修復を図ろうというのか。枯渇資源の回収と再利用を徹底するのか。人口を調整して最適人口化を目指そうとしているのか。それとも、残された地球人からの徹底した搾取か。

このままでは従来の方針の早急の見直しが必要だが、いま「黒の集団」はなにを考えているのか。

アムンはようやく結論づける。

「やはり、世界帝国建設を急ぐようとしているのだ。そして徹底的な管理のもとで、限りなき搾取か……」

アムンはふと、遺伝子組み換え作物を思い浮かべた。

湖畔の一軒家のふたりが消え、対岸の「黒の集団」も消えたのはなぜか。ふたりが消えてから、彼らも消えたのか。それとも、彼らがふたりを消してしまったのか。彼らがふたりを連れて消えたのか。

アムンはソファに座らされていたというふたりの人形を思い浮かべる。この二体の人形が謎を解くヒントでないか。

アムンの頭のなかで稲妻が走る。

「そうか。そういうことだったのか」

アムンは何度も頷いた。

53

「ミサ、さあ、はじめようか」

ハクリは長く伸びている白い顎髭を左手で撫でるようにしごいている。

「でも、あのふたりはいなくなつたし、合体はムリだわ。それにまだ耀には酷じやないかしら」

「なんでもないですよ。ぼくのことは心配しないでください。ところで、そのガツタイとなんですか」

いつのまにか、耀がすぐ後ろに来ている。

未佐は耀をじつと見た。すでに落ち着いた大人の風貌をしている。堅く結んだ口元は強い意志を現し、澄んだ目は冷徹な光を放っている。いつ、そんなふうになつたのか。彼女は胸の高鳴りを覚えた。

「合体か……」

金属性の声がした。アムンだった。

「あれは先の話だ。そのまえに、先頃『黒の集団』が作戦を変えたらしいので、それに応じて、われわれの作戦も見直ししようと思うのだ。これまでの作戦を大幅に変更することになるだろう……」

アムンはハクリ、未佐、耀をそばに呼び寄せる。

「『黒の集団』は世界帝国建設を即刻はじめようとしている。これに対して、これまでのような受け身の対応を止め、全面的に闘いを挑み、『黒の集団』はもちろん、これと類似の行動をとる集団や組織を徹底的に排除するのだ。そして『黒の集団』の世界帝国建設を阻止する一方、これに対抗して、われわれは『黒の集団』の行動に反対する者とともに、われわれの『地球環境保護共同体』をつくり、これを世界中に浸透増殖させ、『黒の集団』らの行動範囲を縮小していき、最終的に連中の息の根を止めることをめざすのだ……」

アムンは金属性の声を一層高く張り上げる。

「とにかく、現在グローバル化の掛け声とともに、より一層徹底させようとしている新自由主義と称する弱肉強食型経済は弱者を食いものにするばかりではなく、地球環境をも台無しにする悪魔のシステムなのだ。これを操る『黒の集団』は地球人の仮面を被った人で無し（人非人）だ。われわれは弱者の側に立って、彼らを助け、連中に立ち向かうことにする。『地球環境保護共同体』についてはひとつの案をもっているが、皆で議論して詰めていけばいい。まずは、『黒の集団』らの行動を阻止することだ。いな、頼んだぞ」

アムンは大きな深呼吸を二度つづけた。そしてハクリに目を向ける。ハクリは未佐と耀を見、大きく頷く。未佐もそして耀も大きく頷き返した。

(第二巻 完)

(これはフィクションであり、実在の個人や組織体とは一切関係がありません)



天翔け地這う 第二巻 超々人への道

生野以久男

二〇一二年六月三〇日第一版発行

(c) Ikuo Ikuno 2012

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 [www.kinokopress.com](http://www.kinokopress.com) 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁  
じられています。

ISBN なし